

**平成16・17年度
白山社奥社保存修理工事報告書**

2007年3月

白山社奥社保存修理委員会
長野県飯田市教育委員会

平成16・17年度 白山社奥社保存修理工事報告書

2007年3月

白山社奥社保存修理委員会
長野県飯田市教育委員会

序

市街地の西に鎮座する靈峰風越山、ここは古より神宿る山として人々の信仰を集めた山です。その山頂付近に建つ重要文化財白山社奥社本殿は、室町時代の永正6年（1509）に建てられ、平成22年には500年になります。高山に建てられている文化財としては、我国で3番目の高さであり、祖先の熱い想いが結実した建物です。このような場所でおよそ500年もの間、風雪に耐えて奥社が平成の今に引き継がれてきたことは、まさに奇跡という他なく、これを守り後世に伝えていくことは今に生きる私たちの責務であるといえます。

しかし前回の修理からおよそ30年が経ち、傷みが目立つようになってきました。そこで先人達の残してくれた貴重な文化遺産を守るために、地元丸山連合自治会を中心に保存修理委員会を組織し、文化庁、長野県教育委員会、飯田市教育委員会の指導の下、平成16・17年度文化財保存修理事業として、「平成の大修理」を実施致しました。また、この事業を単に文化財の保存修理活動で終わらせることなく、郷土に対する愛着を深めるための礎としたいとの想いから、さまざまな活動を行いました。自然遺産と歴史遺産の複合である風越山と白山社について知ることで、郷土愛が少しでも深まれば幸いです。

おかげ様で、地元丸山地区のみならず、郡市民の皆様のご理解とご協力を賜りまして、無事完了することができました。「みんなの力」の結集の賜物と思い、ここに厚く御礼を申し上げる次第です。

平成19年3月吉日

白山社奥社保存修理委員会

委員長（丸山連合自治会長） 中田 具美

序

白山社奥社は、飯田市のシンボルともいえる風越山の山頂付近にあります。本殿は昭和9年文部省告示第22号により国宝に指定されたものであり、付属する幣殿と拝殿は飯田市有形文化財となっております。本殿は室町時代の建立以来、風雪にさらされながらも先人の想いにより今までその姿を伝えています。しかしながら、前回の保存修理工事より既に30年経過し、屋根の耐用年数が近づいてまいりました。そこで文化庁、長野県教育委員会、飯田市教育委員会、地元丸山連合自治会をはじめとする関係者の指導・援助により今回の保存修理「平成の大修理」を実施いたしました。

この度の平成の大修理は、平成16年12月に着手し、平成17年9月に完了しました。これにより往時を偲ぶ見事な神社の再現を見るに至りました。所有者である白山社をはじめ、関係者の喜びこれに過ぎるものではなく、この貴重な文化財を永く後世に伝える初心をあらたにするものであります。

この報告書は、工事の記録と工事中の調査に基づく資料をまとめたもので、この文化財を広く世に紹介するとともに、後世に伝える資料として活用されることを願うものであります。そして、地育力—飯田の資産を活用して、飯田の価値と独自性に自信と誇りを持つ人を育む力を高める力の一端となればと思います。

終わりに、ご指導ご助言を寄せられました文化庁、長野県、飯田市の関係者と、工事の設計監理にあたられました財団法人文化財建造物保存技術協会、施工にあたられました田中社寺株式会社、扉絵につきまして御所見をいただきました中野照夫先生、そして平成の大修理を支えてくださいました地元丸山地区をはじめとする地域の皆様に対して、心から謝意を表する次第です。

平成19年3月吉日

白山社奥社保存修理委員会

副委員長（飯田市教育長） 伊澤 宏爾

例　言

1. 本報告書は、長野県飯田市上飯田7000番地に所在する、重要文化財白山社奥社本殿および飯田市有形文化財白山社奥社幣・拝殿の平成16・17年度に実施した保存修理工事の記録をまとめたものである。
2. 報告書作成にあたっては、修理工事の概要のほか、白山社の概要、工事の経過、図面、新発見の墨書きなどをまとめた。なお、昭和14・15年度の修理工事報告書は入手困難な状況が永らく続いたが、再録されたものが平成17年に刊行されている。
文生書院 2005 「國寶白山社奥社本殿修理工事報告書」 戦前期 国寶・重要文化財建造物修理工事報告書集成第8巻 中部-4
3. 本報告書は、羽生俊郎が編集し、馬場保之が総括した。執筆は下記のとおりである。

第Ⅰ章 羽生 俊郎

第Ⅱ章 羽生 俊郎

第Ⅲ章 木村 和夫

第Ⅳ章 第1節 中野 照男

第2節 羽生 俊郎

4. 本書に掲載している写真については、北原忠志・桜井弘人・木村和夫・羽生俊郎が撮影したものを掲載した。図面については桜井弘人・小西美術工藝社・三井考則が撮影した。
5. 掲載した諸記録については、飯田市滝ノ沢6684 宗教法人白山社および飯田市大久保町2534 飯田市教育委員会で保存している。

目 次

本 文

序		第Ⅱ章 研究事項	50
例 言		第 1 節 扉絵について	50
目 次		第 2 節 新発見の墨書き	51
第Ⅰ章 経 過	1		
第 1 節 工事に至る経過	1		
第 2 節 工事の経過	1		
第 3 節 組 織	2		
第 1 項 白山社奥社保存修理委員会	2		
第 2 項 設計監理者	3		
第 3 項 施工者	3		
第 4 項 指導・協力	4		
第 4 節 経 費	4		
第Ⅱ章 概 要	6		
第 1 節 白山社の概要	6		
第 1 項 本 殿	6		
第 2 項 幣拝殿・随身門	6		
第 3 項 里宮・参道	7		
第 4 項 白山社の歴史	8		
第 2 節 周辺の環境	8		
第 1 項 地理的環境	9		
第 2 項 歴史的環境	9		
第Ⅲ章 保存修理工事の概要	11		
第 1 節 重要文化財白山社奥社本殿	11		
第 1 項 破損状況	11		
第 2 項 修理方針	11		
第 3 項 工事実施仕様	13		
(1) 通 則	13		
(2) 板設工事	13		
(3) 木 工 事	16		
(4) 屋根工事	19		
(5) 塗装工事	23		
(6) 扉絵保存修理施工報告書	25		
(7) 雜 工 事	31		
(8) 資材運搬	33		
(9) 赤外線写真委託	34		
第 2 節 飯田市指定有形文化財白山社奥社幣・拝殿	38		
第 1 項 破損状況	38		
第 2 項 修理方針	38		
第 3 項 工事実施仕様	38		
(1) 通 則	38		
(2) 板設工事	39		
(3) 木 工 事	39		
(4) 屋根工事	44		
(5) 塗装工事	46		
(6) 雜 工 事	48		
(7) 資材運搬	49		
第Ⅳ章 写真図版	50		
図版 1 風越山遠景・白山社絵図	55		
図版 2 修理前・同 本殿側面	56		
図版 3 修理前 本殿内部・同上	57		
図版 4 修理後	58		
図版 5 修理後 本殿側面	59		
図版 6 修理後 本殿側面	60		
図版 7 修理後 本殿内部	61		
図版 8 修理後 本殿背面・拝殿虹梁	62		
図版 9 本殿身舎正面腰羽目板唐獅子（修理前）東・同 中央・同 西	63		
図版10 扉絵 表（修理後） 東・同 中央・同 西	64		
図版11 扉絵 白澤（修理後）	65		
図版12 扉絵 青龍（修理後）	66		
図版13 扉絵 玄武（修理後）	67		
図版14 扉絵 朱雀（修理後）	68		
図版15 扉絵 白虎（修理後）	69		
図版16 扉絵 麒麟（修理後）	70		
図版17 墓書き 全体・同 部分	71		

第一章 経過

第1節 工事に至る経過

平成10年5月20日、所有者より重要文化財 白山社奥社本殿の土台と柱の一部が腐食しているため、所有者より修繕の要望があがつた。その後、有限会社 信濃伝統建築研究所に委託し、破損状況等の詳細な把握を行なった。その結果、こけら葺きである屋根の耐用年数と資材確保を考慮し、平成17年度の事業実施を目安に必要な諸手続きを執り行った。

平成11年度には、まず6月2日に財團法人文化財保存技術協会 武内正和氏が破損状況の確認を行い、続いて7月8日に文化庁建造物課 大和智調査官による現地指導を実施した。この指導により、本殿の保存修理工事の概要が決まるとともに、併せて幣・拝殿の保存修理工事も実施することとなった。また、一部緊急性の高い本殿の土台については、応急処置を行うこととし、11月4日に有限会社久保田建築が実施した。

平成16年6月23日には、文化庁 熊本達哉調査官による現地指導を実施し、保存修理工事の概要について確認した。

第2節 工事の経過

以上の経過を経て、本殿は平成16年12月1日より事業に着手した。設計監理業務は財團法人文化財保存技術協会に委託し、工事は指名競争入札による請負工事とし、岐阜県岐阜市加納東丸町2丁目20番地 田中社寺株式会社が実施した。現場は山頂に位置するため冬期は積雪により施工できず、平成16年度は準備期間として資材の購入、加工等を実施した。

これに関する手続きについては、平成16年11月16日付 16府財第288号にて国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定を受け、また次年度施工を迅速に進めるため、資材の購入を前倒しで実施することとする計画変更を申請し、平成17年1月31日付16財建造第82号をもって文化庁により承認されている。

平成17年度の事業は、4月12日より現地での作業に着手した。まず仮設の休憩所と資材置場の確保、透構の解体等を行い、5月1日に第1回のヘリコプターによる荷揚げを実施した。ヘリコプター離発着の基地には飯田市上郷黒田 山田グラウンドの駐車場を、荷降ろしには随身門隣りの平坦地を利用した。以降、順次工程に従い施工した。工程については下記の工程表の示すとおりであり、内容については第Ⅲ章で詳細に述べる。

並装工事を実施する中で、扉絵が漆絵であることが判明した。そのため、山頂での保存処理は不可能と判断し、東京国立博物館において実施することとした。

7月29日に文化庁 武内正和調査官に現地指導を依頼し、工事の確認と今後の計画について指導を受けた。

扉絵は、8月31日東京国立博物館において、東京国立博物館 敦仁郷秀明氏、東京国立博物館 田沢裕賀氏、渋谷区松濤美術館 矢島新氏、小西美術工藝社株式会社 岩本元氏に、9月26日には飯田市美術博物館において佛教大學 中島純司氏に依頼し、調査を実施した。

現地作業が終了したのは扉絵の取り付けと資材の搬出を終了した9月27日である。

17年度の手続きに関しては、平成17年6月1日付17府財第51号をもって国宝重要文化財等保存整備費補助金が交付決定された。しかし、扉絵の技法調査のため、赤外線撮影を実施すること、奥社周辺の危険木の枝払いを行うこと、新たな腐朽が確認されたため補修を行うこと、こけら葺きの面積の減少、資材等の増による運搬費の増、保存修理工事報告書作成費用の計上を行う計画変更を申請し、平成17年9月1日付 17委府財第15の38号をもって文化庁に承認された。さらに入札による工事費と設計監理料の減による事業費の減額と、清算事務の延長のため事業内容を変更し、平成17年11月1日付17府財第238号をもって変更交付決定を受けている。

平成17年12月31日に、補助事業についての事業が完

了し、翌18年度は報告書の作成にあたった。

幣・拝殿は本殿と同様、16年度は事前の準備を行った。平成17年度は6月6日に事業に着手し、9月27日に工事は完了した。11月27日には平成17年度の付帯工事として、資材運搬の関係で伐採した箇所への植樹を行った。幣・拝殿の保存修理工事では自主財源の確保が困難なため、平成17年度信州ルネサンス革命推進事業支援金（コモンズ支援金）を申請し、平成17年7月19日付17下伊地総第99号により採択されている。

なお、白山社奥社保存修理工事委員会では今次保存修理工事を地域の歴史と財産を知る好機と捉え、随時登山者には説明を行うとともに、白山社、飯田市教育委員会、財団法人文化財建造物保存技術協会等と協力し、平成17年度に下記の諸事業を行った。

6月14日

文化財学習会「風越山の歴史と文化を知ろう」

講師 白山社総代会長 山下 守弘

場所 丸山公民館 参加者約40人

6月18日

保存修理工事現地見学会

講師 財団法人文化財建造物保存技術協会

東京支部 木村 和夫

白山社総代会長 山下 守弘

実演 田中社寺株式会社

場所 風越山山頂 参加者約120人

6月25日～7月10日

特別陳列「風越山とその信仰」

解説 飯田市美術博物館

桜井 弘人 織田 顯行

場所 飯田市美術博物館 入館者3247人

7月3日

文化財学習会

「白山社奥社の文化建築としての魅力」

講師 飯田市文化財審議委員 吉澤 政己

場所 飯田市美術博物館 参加者約40人

9月17日～同月25日

特別公開「白山社奥社の屏絵」

解説 飯田市美術博物館

桜井 弘人 織田 顯行

場所 飯田市美術博物館 入館者2338人

翌平成18年度は報告書作成にあたった。特にこれまで具体的な研究事例に乏しい屏絵について、東京文化財研究所 中野照男氏にその所見をいただくことができた。

第3節 組織

第1項 事務局

今次保存修理工事にあたっては、地元丸山地区と所有者と行政を中心とする、白山社奥社保存修理工事委員会を組織した。

委員長

丸山連合自治会長・丸山町1丁目自治会長・

丸山享保会生産森林組合長理事 中田 具美
副委員長

丸山連合副自治会長・白山町1丁目自治会長

細川 仁司

同・丸山町4丁目自治会長 伊藤 清春

白山社宮司 近藤 政彰

丸山町3丁目自治会長・白山社総代会長

山下 守弘

飯田市教育委員会教育次長

尾曾 幹男

（平成16年度）

中井 洋一

特別委員

衆議院議員 宮下 一郎

元衆議院議員 中島 衛

長野県議会議員 小池 清

同 小林 利一

同 古田 美士

前長野県議会議員 今井 勝幸

飯田市議会議員 伊藤 清春

同 水井 一英

飯田市教育委員会教育長 久保田平八郎

伊澤 宏爾

会計					
白山社総代	山田 三郎			酒井 清雄	酒井 博司
丸山連合自治会会長・滝の沢自治会長	久保田 謙	白山社元総代		野口 利人	細沢 静雄
会計補助				伊藤 悅	池元 正義
飯田市教育委員会生涯学習課文化財保護係長				栗林喜代司	小池 忠志
(平成16年度)	吉川 豊			佐々木 明	佐藤 武
(平成17年度)	馬場 保之			下平 純郎	高木 尚
書記				玉置 伸二	塚平 嘉芳
白山社総代	岩戸 久義	境内地氏神代表		前沢富實保	吉田 信一
書記補助				北原 美顯	座光寺主税
飯田市教育委員会生涯学習課文化財保護係				嶽野 雅夫	細沢 彰雄
(平成16年度)	佐々木行博	崇敬者		松下 勝彦	
(平成17年度)	羽生 優郎			北原 光由	久保田英司
委員				熊谷 久通	酒井 豊
今宮町1丁目自治会長	青山 増俊			原 宏明	松下 芳治
今宮町2丁目自治会長	矢澤 輝一	飯田市文化財審議委員		吉野 文男	
今宮町3丁目自治会長	石井 千尋			岡田 正彦	林 淳和
今宮町4丁目自治会長	杉山 春樹	同・信濃建築史研究室		北城 節雄	山内 尚巳
白山町2丁目自治会長	鈴木 宏和	飯田市教育委員会生涯学習課長		吉澤 政己	
白山町3丁目東自治会長	近藤 正秋			小林 正春	
白山町3丁目南自治会長	中田 善雄				
丸山町2丁目自治会長	佐々木幸彦	第2項 設計監理者			
丸山町4丁目自治会長(平成17年度)	武田 勇	設計監理委託			
丸山連合自治会前副会長	遠山 光治	財団法人文化財建造物保存技術協会			
丸山享保会生産森林組合長理事	酒向 龍三	工事監督	東京支部副支部長	木村 和夫	
丸山享保会生産森林組合会計理事	中田 修治				
丸山連合青壮年会長	小澤 伸好	第3項 施工者			
丸山連合青壮年会副会長	斎藤 純	屏絵赤外線写真撮影委託			
丸山連合青壮年会副会長	松村 栄一	有限会社三井考測		三井 猛	
丸山連合婦人会会长	菅沼 君江	工事請負			
丸山連合婦人会副会長	塩澤登喜子	田中社寺株式会社			
丸山連合婦人会副会長	木下ケイ子	現場代理人	専務取締役	吉島 雅彦	
滝の沢元自治会長	塩澤 武				
滝の沢前自治会長	近藤 渉	こけら葺工事			
滝の沢高齢者クラブ会長	藤田 武彦	田中社寺株式会社	寒河江清人	吉川 有良	
風越山を愛する会副会長	寺岡 義治			伊藤 貴弘	三ツ出俊平
丸山公民館館長	片桐 清之				
飯田水引組合代表	田中 正彦	仮設・木工事			
白山社総代	北原 忠志	久保田浩史	有限会社久保田建築店	久保田英司	松下八寿夫

久保田晃弘 村松 宣志
中島 徳雄

富田 清士
岡本 克彦
河野 直樹
小川 昌聰
小西 篤史
酒匂 智史

木工事

三清建築

桜井 三也 桜井 信之
桜井 覧同 玉置 伸二
熊谷 正美 牧野 康洋
塩沢 裕輝 清川 基
桜井 啓男

その他

丸山燐々会

細沢 彰雄 松下 秀雄
田中 健三 松下 清美
久保田浩史 塩沢 三郎
酒井八重子 久保田里子

塗装工事

株式会社小西美術工藝社

原 登 大木 康至
亀田 卓良 依田 司
岩本 元 倉山 剛

第4項 指導・協力

文化庁、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所、
東京国立博物館、長野県教育委員会、飯田教育事務所、
下伊那地方事務所、渋谷区松濤美術館、佛教大学、
有限会社信濃伝統建築研究所、信濃建築史研究所、
中野照男、教仁郷秀明、田沢裕賀、矢島新、中島純司

石工事

有限会社玉置石材店

玉置 作男 原 次郎

第4節 経費

小池工業株式会社 小池 正利 高須 薫
バラメーダ ベクトル
鈴木 朝二 神谷 俊輔

今次保存修理工事の収支は別表のとおりである。また市内外から甚大なる浄財を戴いた。

足場工事

信和サービス南信有限会社

清水 隆彦 可知 宏章
米山 和希 森下 洋
宮内 良治

伐採工事

総合インテック株式会社

伊藤 嘉夫 小松 弘
小松 正之 百瀬 直良
倉沢 伸一

資料運搬

中日本航空株式会社

小澤 優 柳谷 俊夫
後藤 和彦 山田 隆広

表1 収入 (単位:円)

項目	本殿	幣・拝殿	合計
国庫補助金	37,201,000	0	37,201,000
県補助金	0	2,370,000	2,370,000
市補助金	2,000,000	0	2,000,000
自主財源	7,301,000	19,957,227	27,258,227
合計	46,502,000	22,327,227	68,829,227

表2 支出 (単位:円)

項目	本殿	幣・拝殿	合計	
修理工事経費	委託料 (赤外線写真撮影)	170,000	0	170,000
	消費税	8,500	0	8,500
	小計	178,500	0	178,500
	仮設工事	5,922,897	912,069	6,834,966
	木工事	3,859,290	5,843,800	9,703,090
	屋根工事	10,106,849	3,667,754	13,774,603
	塗装工事	4,849,530	4,265,176	9,114,706
	雜工事	1,020,694	745,036	1,765,730
	資材運搬費	9,134,240	2,905,986	12,040,226
	諸経費	6,251,500	1,473,179	7,724,679
工事請負費	消費税	2,057,250	990,650	3,047,900
	小計	43,202,250	20,803,650	64,005,900
	付帯工事費	0	11,200	11,200
設計料及び監理料	小計	43,380,750	20,814,850	64,195,600
	設計監理費	2,923,000	1,416,000	4,339,000
	消費税	146,150	70,800	216,950
事務費	小計	3,069,150	1,486,800	4,555,950
	小計	52,100	25,577	77,677
合計		46,502,000	22,327,227	68,829,227

第Ⅱ章 白山社の概要

第1節 白山社の概要

白山社は飯田市街地の北西に鎮座し、里宮と奥宮（奥社）とに分かれている。里宮は飯田市滝の沢6684番地、飯田市街地の北端に位置し、奥社は飯田市上飯田7,000番地、市街地の西方にそびえる風越山（かざこしやま）の頂上付近に位置する。風越山山頂の標高は1,535mを測る。奥社の所在地は標高約1,460mの僅かな平坦地にある。本殿には南側に幣・拝殿が付属し、奥社全体の主軸は西に偏った北方向を示している。里宮とは約900mの標高差がある。以下にそれぞれの概要を掲載する。

第1項 奥社本殿

（1）指定区分：重要文化財

（2）指 定：昭和9年1月30日

文部省告示第22号

（3）構造形式：三間社流造、こけら葺

（4）規 模：身舎 術行4.800m、梁間1.882m
 向拝 術行4.800m、梁間1.600m

（5）建立年代：永正6年（1509）

（6）様 式 等：

主体は和様からなり、それに禪宗様と大仏様を加えた折衷様とみることができる。身舎は土台を廻して円柱を立て、腰貫、腰長押、内法長押、頭貫を入れ、頭貫には禪宗様の木鼻を付ける。斗拱には和様出組として、柱上と外側の二本の桁を受ける。禪宗様の木鼻を付け、柱上には二段目の肘木を左右に伸ばして、卷斗を二手伸ばしに配置する。中檼は蔓股上に双斗をおき、花肘木を受け、双斗を二段に重ねており、大仏様と和様の融合とみることができる。

身舎正面の柱間は各間とも幣軸付き両開きの板扉とし、扉面に白澤・青龍・玄武・朱雀・白虎・麒麟の靈獸を描いており、腰板にも唐獅子が描かれている。背面には中央のみ板扉があり、白衣觀音が描かれている。

向拝柱は角柱であり、中央二本の柱を抜いて1間と

している。柱上に持送り肘木をつけて虹梁を架け渡し、虹梁鼻に象鼻を付ける。斗拱は前後とも出組として三本の桁を受ける。身舎と同じく禪宗様の木鼻を付け、柱上は二段目の肘木を左右に伸ばして、卷斗を二手伸ばしに配置する。虹梁中程にも同様に斗拱を置き、身舎寄りには拳鼻を二段に付け、蝶型を付けた手挾を乗せる。

妻飾りは虹梁を架け渡し、幕股を笈形状に置いて、大瓶束を立て、禪宗様拳鼻を左右と外側に付ける。大瓶束上には三手組を三段に組み、二段目には花肘木を乗せ、三段目には桁行に三手伸ばして棟木を受ける。破風には拝みに鰐付きの三つ花懸魚とかぶら懸魚とし、向拝桁に桁隠を付ける。

屋根はこけら葺とし、二重棟付を廻す。棟は箱棟をおき、両端に鬼板を付ける。

塗装は身舎内部を除いて内外部とともに全体を弁柄塗りとするが、身舎正面は腰長押と内法長押を黒漆塗りとし、中寄り二本の柱を金箔押して飾る。

軒を支える桁を身舎では二本隣接して並べ、向拝では三本隣接して並べる形式は、県内の室町時代後期の社殿にいくつかの類例があるが、当方特有の形式とみられる。また高欄がないことも本殿の特徴としてあげられる。

昭和14・15年度の解体修理の際に、向拝実肘木に永正6年（1509）の銘が見つかり、建立年代が判明した。形式学的には15世紀中頃の特徴を備えており、若干の時期差はあるものの、実肘木の墨書きの年代とはほぼ一致する。

第2項 奥社幣・拝殿、隨身門

平成16・17年度に保存修理工事を実施したのは、幣・拝殿のみであるが、隨身門も同時に指定されている。隨身門は奥社の所在する平坦地より10m程度下の平坦地に位置する。

（1）指定区分：飯田市有形文化財

（2）指 定：平成15年12月25日 第62号

(3) 構造形式：

幣殿 衎行一間、梁間一間、両下げ造、銅板葺
拝殿 衎行三間、梁間二間、入母屋造、妻入り、
銅板葺

隨身門 三間一戸、切妻造、鉄板葺

(4) 規模：

幣殿 衎行4.668m、梁間2.241m
拝殿 衎行6.469m、梁間3.103m
隨身門 衎行5.452m、梁間1.474m

(5) 建立年代：

幣・拝殿 享保16年（1731）
隨身門 安永4年（1775）

(6) 様式等：

幣・拝殿は本殿と比較して、簡素な形式で造られている。幣殿は拝殿よりも高くして、本殿床に繋がる。幣殿・拝殿ともにそれぞれの土台を廻して角柱を立てる。拝殿は腰貫、腰長押、内法貫、内法長押を入れて、頭貫には桙宗様の木鼻を付ける。幣・拝殿間には桁行に虹梁を架け渡し、虹梁中央に幕股を置き、卷斗と実肘木を乗せて桁を受ける。

斗拱は大斗実肘木とし、軒は一軒とする。正面妻飾は木通格子を嵌め、破風に鰐付きのかぶら懸魚を付ける。

中間は正面中央間を腰高格子戸内開きとし、両脇間に蔀戸を吊り、東面後方一間を板戸片引きとする他は、周囲は総板壁とする。内部は幣・拝殿境及び幣殿・本殿境も開放とし、幣・拝殿ともにそれぞれ板床を張り、棹縁天井とする。

屋根は銅版葺きとし、二重軒付を廻す。棟は南北方向に箱棟を置いて本殿箱棟と棟高さを揃えてT字型に組み、正面に鬼板を付ける。軒はこけら葺の二重軒付を廻す。

塗装は床・天井を除いて内外部ともに弁柄塗りとし、幣・拝殿境の虹梁上幕股には、菊理姫神の本地仏である十一面觀音の種子（キヤ）が陽刻されており、内部を装飾している。

建築年代は棟札の内容から享保16年（1731）で、大工棟梁は北方村（飯田市北方）宮下半助尉氏、葺氏は玉本安右衛門であることがわかる。本殿の修理に併せ

て建設されたものであり、本殿の向拝がこの時に屋内に取り込まれたので、本殿の扉絵は腰板の絵が良く残ることとなった。

随身門は通路部分の正面側の柱を円柱とし、他は全て角柱である。土台の上に角柱を立て、腰貫・内法貫・頭貫を通し、柱上に三斗・実肘木を置く。

屋根は鉄板葺きとし、塗装は内外部ともに弁柄塗りである。

建築年代に関する資料は不明であるが、内側を向いた唐獅子の木鼻は、安永4年（1775）に伝馬町の細野文五郎藤原輝哲によって建てられた開善寺ニの門（総門）に似ており、本殿修理の墨書きにも安永4年のものがあるので、この時に隨身門が建てられたと考えられる。本殿修理の大工は、墨書きに上飯田村の松沢治三郎、松尾町の内蔵首八と記されているので、隨身門も彼らによって建てられたと考えられる。

第3項 里宮・参道

廢仏毀釈により現在里宮に残る建造物は多くない。本殿・拝殿・婚嫁殿・薬師堂・絵馬堂・隨身門等が存在する。

隨身門は昭和60年に飯田市有形文化財となっている。入母屋造、桟瓦葺の三間一戸楼門で、屋根の正面に軒唐破風をつけている。建築年代に関する史料は不明であるが、文政11年（1828）の再建と伝えられる。通路左右にある柱上部の木鼻は琴高・王子喬などの仙人彫刻とし、天井には十二支が刻まれている。また、羽目には竜・唐獅子・鷹などの彫刻が付けられている。そのほか、貫・尾垂木などには地紋彫を施し、兎ノ毛通は天女の彫刻とするなど、江戸時代後期から幕末に至る彫刻装飾多様の樓門を代表する建築である。その他の建造物等はいずれも文化財として指定されていない物件であり、詳細は割愛するが、本殿は諏訪大社上社本宮の宝殿を移築したものであり、拝殿は白山寺時代には護摩堂であったものである。

護摩堂・婚嫁堂には、聖觀音像・十一面觀音像・阿彌陀如來像・伝摩利支天像をはじめとする多くの仏像が残されている。廢仏毀釈以前は、山中の諸堂に安置されていたものとみられる。これらの諸像は制作年代

のはっきりしないものが多いが、十一面觀音像の厨子底裏には、明暦2年(1656)、伝摩利支天像の台座には、享保10年(1726)の墨書きがあり、いずれも江戸期のものと考えられる。

奥社への参道は、里宮から東南へ約400m、現在の白山町2丁目6197番地の大平街道沿いにあった遙拝所を起点としていた。奥社と里宮を眺望できる場所で、奥社へ参詣できない者はここで遙拝したといわれている。かつては鳥居と石灯籠があったが、昭和57年、里宮へ移転されている。丁石には「従是権現迄五十丁」と刻まれており、元禄9年(1696)の郡内でも最も古い丁石といわれている。

里宮から奥社へ至る参道には、比丘尼・虚空藏といった地名や、三十三所觀音をはじめ、駆馬巖・不動明王・名号石・役行者などの石造文化財が残る。石造文化財は、銘により制作年の明らかなものは、いずれも江戸期以降である。明治初期に描かれた権現山白山社古図では、三重塔・虚空藏堂・狗賓堂をはじめとする諸堂が描かれているが、現在は残っていない。

第4項 白山社の歴史

白山社の祭神は、菊理姫命・伊弉諾命・大己貴命の三柱である。廢仏毀釈までは里宮に白山寺と呼ばれる神宮寺があり、天台宗であった。

白山社の開創に関しては確たる資料に乏しく詳細は明らかでないが、先に述べた露頭巨石をともなう原始信仰に発し、ついで白山神の勧進がなされたと考えられる。

『白山寺歴代記』には「信濃國伊那郡伊賀良庄風越山松瀧院白山禪寺者泰澄大師之創也。養老二戊午年大師於此山…」とあり、「権現山白山社由緒記」には「養老二年九月九日越前淺布の人三上泰澄禪師本郡に來たり、風越山頂の神域を相して開山三社権現の神を祭祀すと白山寺記に記載あり」とある。また『白山明神縁起』には、「弘仁十四年立此宮」と記される。このように養老2年(718)9月、加賀白山の開創者泰澄が開いたとする説と弘仁14年(823)の開山とする説があるが、両説ともに社伝の域を出るものではない。

しかしながら、長元5年(1032)、「風越の峯の上に

てみるときは、雲の麓のものにそありける」(詞花集)、文永2年(1265)、「手向にも結ひてゆかむ風越の、裾野の尾花穂に出てにけり」(夫木集)と詠まれるなど、古来より風越山が雲峰として崇められ、そこに社が設けられていたことは想像に難くない。

奥社の建立は『白山寺記』によれば鎌倉時代文治3年(1187)といわれるが、様式は室町時代の様相を示す。実財木に記された墨書きの年代から室町時代永正6年(1509)と判明している。建立者を示す直接的な資料はないが、相当な有力者でなければ建立をなし得ないことから、当時の飯田城主である坂西氏をおいて他には考え難く、建立者は坂西正俊であろうといわれている。

以降、歴代飯田城主により白山社は崇敬され、社殿の修理と建立を続けられてきたことが棟札等により明らかである。天正20年(1592)、寛永3年(1626)、寛文9年(1669)、貞享15年(1688)、宝永元年(1704)、享保16年(1731)、明和元年(1764)、安永4年(1775)、文化3年(1806)、天保9年(1838)、嘉永5年(1852)、明治8年(1875)、大正6年(1917)、そして昭和14・15年度の修理が確認されている。

特に江戸時代200年間にわたり飯田藩主であった堀家の信仰は厚く、奥社に幣・拝殿(享保16年)、隨身門(安永4年)を建立し、安政年間には参道の整備するなどした。

慶応4年(1868)の廢仏毀釈により、多くの仏教建築物等が破壊され、残されたのは奥社と隨身門、里宮の隨身門(飯田市指定文化財)と本殿等わずかとなつた。当時多くの寺社と同じく、仏教色を排除することで白山社は残ることができたが、現在も里宮のことを白山寺と呼ぶ地元住民が多い。

昭和9年1月30日に奥社本殿が国宝指定されたことにより、白山社は、翌月には無格社から一躍県社に昇格している。そして昭和25年の文化財保護法の制定に伴って重要文化財となり、現在に至っている。

第2節 周辺の環境

白山社の概要については以上であるが、ここでは白

山社の周辺の環境について、地理的な側面と、歴史的な側面から概観してみることとする。

第1項 地理的環境

飯田市は、長野県の南部を並走する中央アルプスと南アルプスに挟まれた伊那盆地（俗に「伊那谷」と呼ばれる）の南部を中心とし、平成17年10月1日に上村・南信濃村の2村と合併したことにより、赤石山地と伊那山脈に挟まれた遠山郷と呼ばれる地域も含んでいる。伊那谷は南北に約100kmと長く、北は諏訪地方・塩尻地方に接する。伊那谷の中央には天竜川が南走し、南は遠州地方に、西は中央アルプスを隔てて三河地方にそれぞれ通じており、長野県の南の玄関口といえる位置にある。地形は、伊那谷の中央を流れる天竜川の沖積氾濫原、段丘、扇状地、丘陵と東部の南アルプス、伊那山脈と西部の中央アルプスから形成される。沖積氾濫原の低いところでは標高約370mであるが、中央アルプス・南アルプスは標高3,000m前後の山々が連なる。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超えて、2月の平均気温は1.4℃、8月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量は年間雨量約1,600mm、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬には少ない。総じて、太平洋岸式気候区に属しながらも内陸性気候の要素を持つ地域といえる。

こうした地理的・気候的条件により、飯田・下伊那地方には暖地性から高山性まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帶性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。

白山社奥社が位置する風越山（かざこしやま）は、市中心市街地の西側にそびえる山であり、長野県下伊那郡と木曾郡境を南走する中央アルプスの前山である。中央アルプスの越百山(2,613m)と安平路山(2,361m)の中間部から伊那谷側に出ている尾根で、念丈岳(2,291m)、本高森山(1,890m)、鷹巣山(1,444m)を経て風越山に至る。さらに風越山の前山として、虚空藏山(1,130m)が座している。風越山の西側から南側にかけては飯田松川により、東側から西側にかけ

ては野底川により開析されており、いずれも中央アルプスを源流とし天竜川に流れ込んでいる。

中央アルプスはおよそ80万年前に急上昇を始めた山塊であり、その基盤岩類は領家帯に属する花崗岩である。風越山山頂付近には、花崗岩が節理に沿って風化しブロックになり、風化した砂礫のみがうまく取り除かれた、岩塔といわれる露頭が多くみられる。これは氷河時代に形成されたといわれる。またこれらの花崗岩の隙間に地下水が通り、冷やされた空気が地表に出てくる、風穴が存在する。

風越山の山頂は、東西2つのピークからなる。西側ピークが標高1,535mの山頂であり、東側の標高約1,490mのピークに白山社奥社が所在する。両者の間は比高差10m程の鞍部があり、この鞍部を風が吹き越えることから風越山になったといわれている。または、今次保存修理工事を実施した白山社奥社が存在し、白山妙理大権現を奉ることから、権現山（ごんげんやま）とも呼ばれている。蛇足であるが、風越山は近年「ふうえつざん」と呼ばれる機会が多い。これは、昭和24年に長野県飯田風越（ふうえつ）高等学校の名称が誕生して以降に浸透した呼称である。それ以前は一様に「かざこしやま」あるいは権現山であり、こちらが本来の呼称といえる。

このような地理的要因から、風越山には稀少な植物が多く分布する。特に標高1,000~1,500mにかけてはベニマンサクの自生地があるが、分布域の東北限にあたること、標高約1,100mの高山に分布すること、隔離分布することに特徴があり、昭和43年5月16日に長野県天然記念物に指定されている。また山頂付近に自生するブナ、ミズナラ、イワウチワ等は、市内では稀少種である。花崗岩の露頭とともに平成15年12月25日、飯田市天然記念物に指定されている。

第2項 歴史的環境

飯田の歴史の始まりは、日本列島の歴史の開始時期と同時期まで遡ることができるが、旧石器時代を通じて遺跡の分布は多くない。縄文から弥生時代にかけては多くの遺跡が分布しており、特に縄文時代中期と弥生時代後期に隆盛期がある。

古墳時代における当方は、極めて特徴的なあり方を示す。主として5世紀後半以降、座光寺・上郷・松尾・竜丘地区を中心に、焼滅したもののも含めると700基あまりの古墳が築造され、馬具や馬埋葬墓が数多く確認されていることが特筆される。こうした背景には馬匹生産に関わる集団の存在がいわれており、また近年は出土遺物や人骨から半島系の集団の存在も指摘されている。

続く奈良・平安時代では、座光寺地区桓川遺跡群から正倉群が確認され、古代伊那郡衙に比定されている。付近を古代の官道である東山道が通過していたものとみられ、また郡戸庄・伊賀良庄・伴野庄が拓かれた。

鎌倉時代になると伴野庄知久郷に知久氏、郡戸庄飯田郷には地頭阿曾沼氏の存在が知られる。なお、「飯田」の由来は、「結いの田」といわれ、文献に登場するのはこの時代である。

南北朝時代からは、伊賀良庄において信濃守護職の小笠原氏が松尾・鈴岡にそれぞれ城を構え、勢力を振るうようになってきた。飯田郷においても小笠原氏配下の坂西氏が勢力を強め、享徳元年（1452）には、飯田郷地頭として諱訪上社御射山祭の頭役を務めていることから、室町時代中期には地頭が阿曾沼氏から坂西氏へ替わったものと推察される。坂西氏は、室町時代守護職の権威が衰退し、在地領主の莊園支配や国領の横領が進む中では、飯田城築城や白山社奥社本殿を造営するなど、相当の勢力を有するようになっていったと考えられる。

天文23年（1544）の武田氏侵攻により、最大勢力であった小笠原氏は衰退し、坂西氏も武田氏に従った。武田氏は伊那郡代として飯田城に秋山信友を置き、伊那谷の支配を行ったが、天正10年（1582）の織田信長の侵攻により、飯田城守将の保科正直は逃亡し、坂西織部も敗死して坂西氏は滅びた。

武田氏討伐後、織田信長は毛利秀頼に伊那郡を与えたが、本能寺の変の後、毛利氏は京都に上がり、替わって徳川家康が配下としていた旧族の下条頼安を飯田城に据えた。天正12年（1584）、下条頼安が松尾氏に殺害されると、菅沼定利が郡代として飯田城に入った。天正18年（1590）の徳川家康関東移封に伴い、再び毛

利秀頼、統いて娘婿の京極高知が飯田城に入り伊那郡を支配した。毛利・京極両氏の時代に飯田城は大改修され、城下町は京都風の碁盤目状に整備された。

慶長5年（1600）に間が原の軍功により京極高知が丹波宮津に移封されると、下総古河から小笠原秀政が入り、同18年（1613）松本に移封されるまで在城した。小笠原氏移封後10年間は幕府領となり、小笠原氏がこれを預かっていた。元和3年（1617）脇坂安元が伊予大洲から移封され、2代55年間在城した。脇坂氏は伝馬に力を入れ、中馬の発達と相俟って、伊那谷の政治・経済・文化の中心としての飯田の原形をつくり上げた。

寛文12年（1672）堀親昌が下野烏山から移封され、以後12代200年に亘り飯田藩を統治した。堀飯田藩は2万石前後の外様大名であったが、江戸幕府と関係が深く、10代親斎などは老中格となり天保の改革に参加している。また11代親義は第12～15代將軍に仕え、奏者番や寺社奉行など、幕府の要職を務めた。

近世を通じて飯田町や周辺の農村では、農業や生糸・和紙・元結・傘・柿・漆器などの小工業が発達し、さらに中馬により全国市場と結びつき、独自の發展を遂げた。

明治維新後、版籍奉還・廃藩置県さらに合併を経て飯田藩は飯田県となり、さらに筑摩県・長野県へと組み込まれた。飯田町は明治22年に町制を、昭和12年市制を制定した。それ以降、周辺の町村を吸収合併し今日に至っている。

飯田のまちは、中世末期以降、現在も下伊那地方の中心都市であるといえる。

参考・引用文献

- 賀賀白山社奥社本殿修理事務所 1940 「賀賀白山社奥社本殿修理工事報告書」
下伊那誌編纂委員会 1970 「下伊那史 第六巻」
西山 保 1990 「鳳越山及び白山社に残る文化財」「研究紀要」創刊号
飯田市美術博物館
伊那史学会 1988 「伊那」1988. 10月号 「鳳越山特集」
飯田市美術博物館 2005 「飯田城ガイドブック ～飯田城とその城下町をさぐろう～」
小池貞彦・織田顯平 2006 「翻訳『白山寺延代記』」「白山宮堂歴記」「白山三社大権現縁起」「研究紀要」16号 飯田市美術博物館
吉澤政巳 2006 「白山社奥社の押振・舗身門について」「研究紀要」16号 飯田市美術博物館

第Ⅲ章 保存修理工事の概要

第1節 重要文化財白山社奥社本殿

第1項 破損状況

国庫補助事業によるものとしては、昭和14・15年の解体修理の後、昭和49年に屋根こけら葺の全面葺き替えと箱棟の銅板包み直しを行っている。

前回修理から30年が経過し、こけら葺は全体に苔が生じており、また軒先や谷廻りなど勾配が緩い箇所に葺板の腐朽が見られ、既に葺替年限に達している部分を中心に落ち葉が堆積していた。

本部は左側面の土台付近の腐朽が著しく、身舎柱の下方、壁板、床下の物入の根太・床板なども腐朽していた。

外部の弁柄塗は全体に劣化し、軒裏を除く大部分で剥落が進行し、木地が現れている箇所も見られた。また内部の扉と腰羽目板の彩色は黒が発生しており、一部に剥落を生じていた。

そのほか、基壇石積は全体に縫みが生じ、一部では積み石が移動して崩れ始めていた。

透屏は前回の昭和49年の修理時に解体修理を行っているが、その時取り替えた土台や屋根板は、既に全体に腐朽を生じていた。

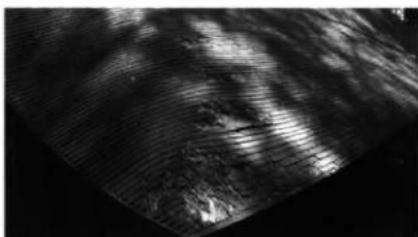
第2項 修理方針

屋根葺替・塗装および部分修理（本部ほか）。

こけら葺の平葺は本殿の全面、幣・拝殿鉄板葺の取り合い部分を葺き替えた。軒付は幣殿取り合い部の平葺施工に支障する範囲の上下軒付を積み直すほかは再用した。野地は破損部分を補修したうえ全面に防腐剤処理を行った。

本部は土台、柱根、床下物入の腐朽部分および懸魚鰭と長押釘隠しの欠損部を補修した。また工事に支障した幣殿の取り付き部を一旦解体して復旧した。

塗装は内外部の弁柄塗りと胡粉塗りを塗り替え、内部の扉および腰羽目板の絵画の黒除去と剥落止めの保有処置を実施した。



破損1 背面屋根こけら葺きの破損状況
苔が繁茂して葺き板は腐朽していた。



破損2 正面屋根こけら葺きの破損状況
落ち葉が堆積して葺き板は摩滅していた。



破損3 背面腰板壁と土台の破損状況
壁板は脱落し、土台は腐朽が甚大であった。



破損4 外部塗装の破損状況
全体に褐色・剥落が進み、カビが付着していた。

そのほか周囲基壇石積みの補修を行ったが、基壇上に建つ透塀は基壇補修や本殿本部の補修に支障するため、一旦解体して諸工事完了後に復旧した。

また各資材の山頂への運搬は、ヘリコプターにより行った。

屋に描かれた漆絵の保存処置を講じるに当り、適切な処置方法を探るために赤外線写真撮影を行い、下地工法や下絵の有無の調査を行った。



破損5 基壇石積みの破損状況
全体に乱れており、東南部は崩落していた。

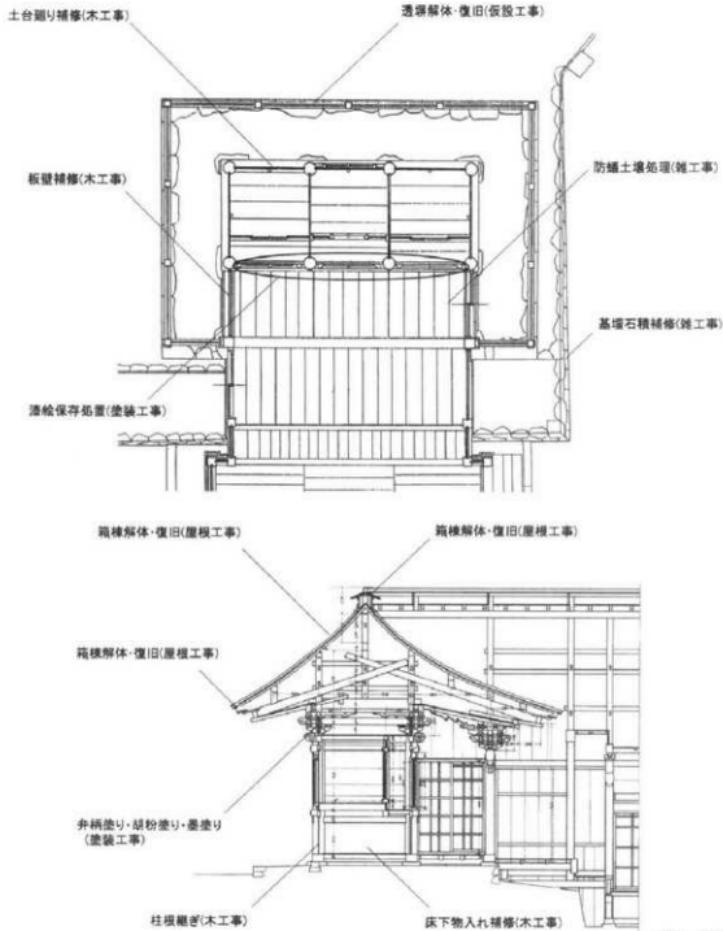


図1 本殿工事概要図

第3項 工事実施仕様

(1) 通 則

① 総 則

この仕様書は概要を示すものであって、記載外の事項または疑問を生じた場合はすべて主任技術者の指示に従い施工した。なお実施にあたっては、さらに詳細な実施仕様を定めて施工した。また原設計仕様を変更する必要のある時は、ただちに計画変更の手続きをした。

工事発注時において、図面および特記仕様書に記載されていない事項は、すべて「建築工事共通仕様書」(国土交通省大臣官房官庁営繕部監修 最新年度版)に掲った。

② 材料検収

工事に使用した一切の材料は、検査員が検査を行い合格したものを使用した。

③ 材料保管

使用した材料で検査員の検査に合格したものはすべて良好な状態で保管し、浸水・盗難・火災に対し十分な対策を講じた。

(2) 仮設工事

① 計 画

建物周囲には軒足場を建設し、屋根面は葺き替え期間中、雨漏りなどを生じさせないようシートで覆い養生を行った。そのほか境内の隨身門脇の空地を整地して作業員休憩所兼倉庫、仮設便所などを設置した。

② 構 造

軒足場は単管組とした。

休憩所兼倉庫はユニットハウスとし、仮設便所は汲み取り式とした。

③ 材 料

イ. 軒足場の主材は下記を標準とした。

単 管……外径48.6mm、肉厚2.4mm、S T K 500。
同上付属品…ベースプレート、ジョイント、直交・
自在クランプ。

足場板……鋼製踏板。

敷 板……足場用合板、幅240mm×長4,000mm。

鉄線、釘……10#なまし鉄線、洋釘など。

ロ. 作業員休憩所兼倉庫はユニットハウスとし、便所

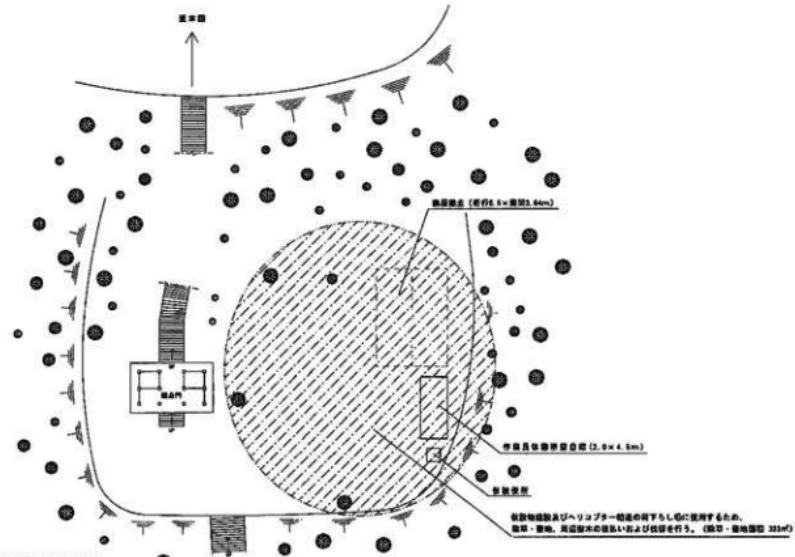


図2 仮設工事概要図

は据え置き式簡易トイレとした。

④ 軒足場

建地は敷板上にベースプレートを釘止めし、軒先より外に柱間1.8m内外に建てた。布は根摺みのうえ、飛び付き1.8m内外、それより上は1.2m内外に取り付けた。棚は軒先より0.9m下に設け、鋼製踏板を組んだ。要所に控柱や筋道を入れて補強した。

⑤ 屋根面シート養生

葺き替え期間中は雨漏りなどないよう屋根全面をシートで覆い養生を行った。

⑥ 仮設用地整備

隨身門脇の空地を仮設用地および資材のヘリコプター輸送の荷下ろし場として使用するため、除草、整地、廃屋の撤去、周囲樹木の枝払いおよび伐採を行った。

周囲樹木の枝払いおよび伐採にあたっては、事業者と輸送会社の立ち会いのうえ、ヘリコプターの飛行に危険のないように計画した。

⑦ 透塀解体・復旧

本殿の周囲に建つ透塀は、基壇の補修および本殿の本部補修に支障するため、一旦解体し、諸工事完了後に復旧した。

解体は可能な限り大外しとし、復旧にあたっては腐朽部分の補修を行い、本部保護のため、在来と同様に全面を墨塗（2回塗）とした。本部の補修範囲については、調査のうえ実施計画を立てて施工した。

⑧ 危険樹木枝払い

本殿の背面に寄り立つ樹木の腐朽した枝は、落下して建物に損傷を与える恐れがあったため、15本を枝払いした。処理した枝は、安全な方法で処分した。

⑨ 危害防止

工事実施にあたり法規上必要な危害防止および衛生のことに関しては適当な施設を設けた。また仮設物



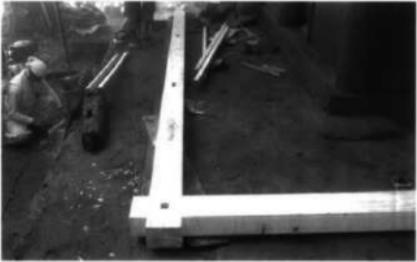
仮設1 仮設用地整備の状況
廃屋を撤去し、樹木を伐採をして整地した。



仮設2 軒足場建設の状況
単管組で足場を組み、鋼製踏板を持ち出した。



仮設3 透塀解体の状況
大外して切り離して、シート養生した。



仮設4 透塀土台組立の状況
腐朽した土台はすべて取り替えた。

の安全管理に対しては工事期間を通じて十分な配慮を行った。各仮設物内には消火器を常備し、危害防止のため表示板などを掲げた。



仮設5 透塀腰板壁の組立作業
腐朽したささら子は取り替えた。



仮設6 透塀木部補修完了の状況
健全な在来材は再用した。



仮設7 透塀木部組立完了の状況
土台下に倒い物を入れて、隙間広く開けた。



仮設8 透塀下見板壁の塗装作業
黒を柿漆で溶いて刷毛塗りした。



仮設9 透塀格子の塗装作業
柿渋による撥水・防腐効果を期待した。



仮設10 透塀復旧完了
今後永らく、本殿を風雪から保護していく。



仮設11 危険樹木枝払いの状況
枝を切り取り、ロープで吊り下げて降ろした。

(3) 木工事

① 計画

本殿土台廻りの腐朽した部材を補修し、懸魚鰭と長押釘隠しの欠損部を補修した。また幣殿の取り付け部は本殿の補修に支障する範囲を解体し、工事完了後に復旧した。

本殿の補修範囲は左側面の土台取り替え、土台の腐朽部の補修、左側面の柱腐朽部分の根組、板壁取り替え

え、腰長押取り替え、床下物入床板および根太の腐朽材の取り替えとし、幣殿の取り付け部も含めて工事に必要な範囲を解体した。詳細な補修範囲については調査のうえ実施計画を立てて施工した。

② 再用材

在来材は将来の保存に支障のない限りつとめて再用した。

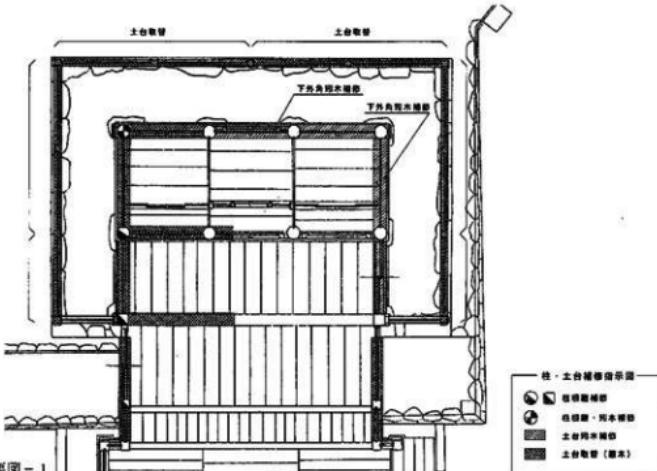


図3 木工事概要図-1

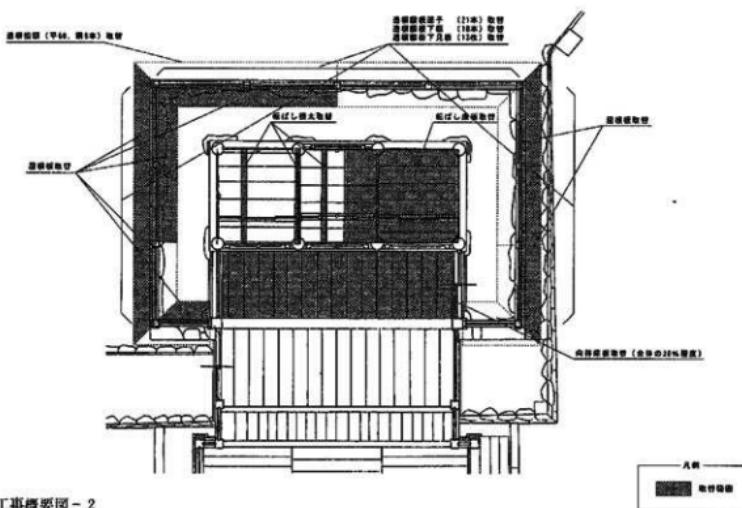


図4 木工事概要図-2

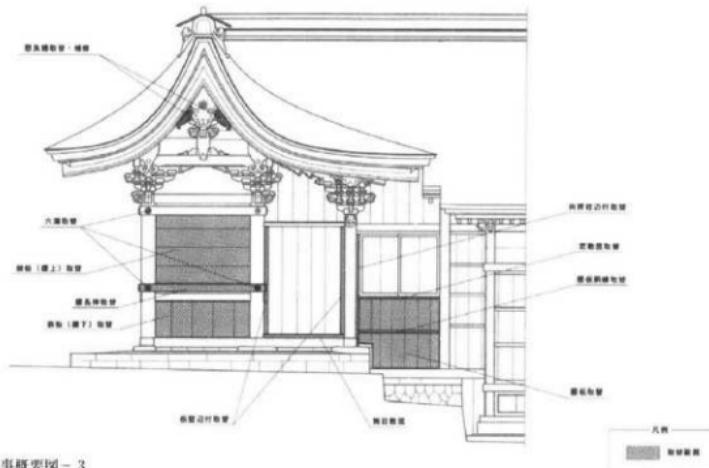


図5 本工事概要図-3

③ 取替材

取替材は原則として在来材と同種材・同品位以上とし、旧形・旧工法を踏襲した。すべて赤身乾燥材とし、化粧材のうちとくに板類は必要に応じて現場で2箇月以上自然乾燥させた。

④ 鉄材

在来品に倣うことを原則とした。ただし見え隠れに使用する釘・金物はJIS規格品を使用した。和釘は鍛鉄製とし、補強金物など規格外のものについては主任技術者の指示によりその都度作製した。

⑤ 繕い

埋木・矧木などの繕いを行った。接着剤は構造的強度を要する箇所はエポキシ系とし、埋木・矧木は酢ビン系を用い、必要に応じて見え隠れに忍釘止めを行って補強した。

⑥ 新材加工

継手・仕口・曲線などは在来のとおりに加工した。柱など軸部の化粧部分は、在来の表面加工を調査のうえ補足材も同様の加工とし、外部に面する箇所はさらにも風食肌に拘えた。



本工1 柱の根綾ぎ材の状況
作業場であらかじめ下加工を施した。



本工2 懸魚の繕い状況
破損した鰯を加工して取り付けた。

⑦ 格印押

取替材および新規補足材は、すべて見え隠れに修理年号を刻した烙印を押した。

⑧ 木部防腐・防蟻処理

イ. 薬 剤

床組材用：財團法人文化財虫害研究所認定品(キシリモントラッド、日本エンパリコケミカルズ社製)

外部腰回り用：同上、塗装部材にも施工可能薬剤(キシリモン 3 W、同上)

イ. 工事範囲

本殿および幣殿取り合い部床組材(今回の解体範囲)。塗装を行う外部の腰長押から下方部材。

ハ. 工 法

塗布または吹き付けとし、薬剤は1m²(木材表面積)あたり0.2リットル以上を処理した。塗装面の防腐・防蟻処理は、念のために1週間以上の乾燥を図った後に、塗装工事に当たるようにした。

⑩ 組立および補強

解体した範囲は、各部材の補修および加工完了後、在来または当初の仕様により取り付けたが、当初材の胴付きなど建物の基幹寸法の要所となる箇所は切削は行わないよう注意した。なお、構造上不完全と認められる部分は、添木・金物などにより補強を講じた。



木工4 柱根離ぎ補修の状況
十字目造いはざにより離ぎ木した。



木工5 土台ひかり付け作業
礎石の形状に合わせて土台下端を加工した。



木工6 足元補修完了の状況
腐朽した土台を取り替え、柱は根離ぎした。



木工3 烙印押し作業
補足材に「平成十六年度修補」の烙印を押した。



木工7 背面板取り替え作業
腐朽した板壁は在来に倣って組み立てた。

(4) 屋根工事

① 計画

本殿の平葺および品軒積の全面、幣・拝殿鉄板葺の取り合い部分を葺き替えた。軒付は幣殿取り合い部の平葺施工に支障する範囲の上下軒付を積み直すほかは再用した。野地は破損部分を補修したうえ、全面に防腐剤処理を行った。

そのほか、幣殿の箱棟および鉄板葺のうち本殿工事に支障する範囲の撤去を行った。なお復旧に当たっては、別途の拝殿工事の中で銅板包みとして整備を行った。

② 旧葺材解体処分

平葺・品軒積の全面、上軒付・下軒付の一部を解体した。解体は丁寧に行い、とくに軒付の解体は再用する軒付を破損しないように注意した。解体した葺材は順次場外に搬出し処理場に搬入して処分した。

③ 箱棟銅板包み解体

箱棟の銅板包みを解体した。解体にあたっては板割など調査のうえ解体し、順次、結束して集積した。

④ 野地補修

平葺解体後、破損部分を補修し、全面に防腐剤を塗布した。詳細な施工範囲は調査のうえ決定した。

⑤ 材料

使用した材料は下記を標準とした。

軒付裏板……口巾15cm以上、厚2.4cm、長30cm、サワラ赤身材。

積板……口巾9cm以上、厚1.2cm、長15cm、サワラ赤身材、手割り板。

上目板……口巾9cm以上、厚0.75cm、長30cm、サワラ赤身材、手割り板。

平葺板……口巾9cm以上、厚0.3cm、長36cm、サワラ赤身材、手割り板。

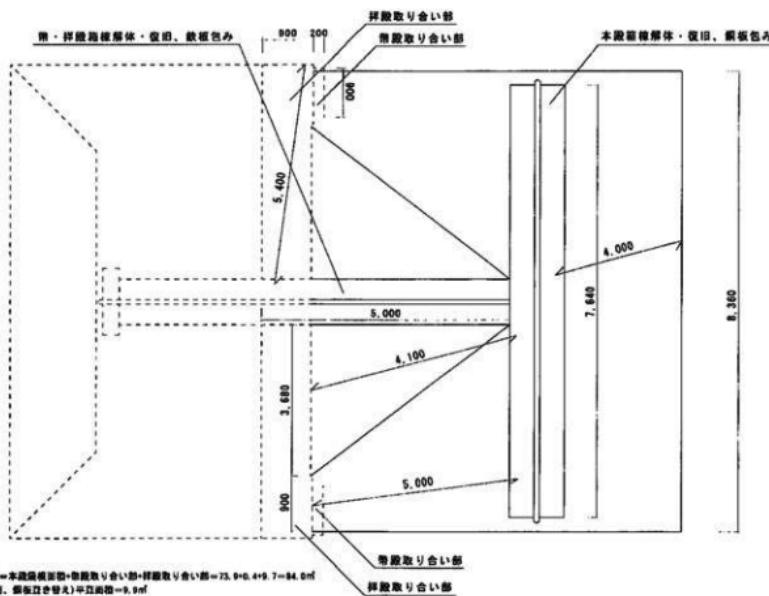


図5 屋根工事概要図

竹 釘…長3cm～3.6cm、培煎品。

水切銅板…定尺判、厚0.4mm、幅9cmに切断し、水切り加工したもの。

葺込銅板…定尺判、厚0.3mm、幅6cmに切断したもの。

銅 釘…14#平頭、長3cm。

丸 釘…JIS規格品。

⑥ 軒付 積

裏板は在来の出に嵌い、尻手に水垂れ棟を打ち、板両傍を割り合わせて竹合釘を入れ、鼻先の通り良く前後2通り洋釘で打ち止めた。積板は在来の投げ勾配に合わせて加工し、板傍をなじみよく合わせて千鳥に積み、1枚ごとに横歩み1.5～1.8cm間隔に2通り竹釘で打ち締め、順次、隅反増しなど格好良く積み上げ、木口は在来の投げ勾配に合わせ鉋削り仕上げとした。

なお再用した軒付木口面は歛の付着によって緑変していたので、鉋削りによって歛と劣化した本部表面を取り除いた。

⑦ 上目板、水切銅板

水切銅板は軒付積上に在来の出に合わせて銅釘で打ち止めた。上目板は2枚重ねとし、横歩み1.5～1.8cm間隔に2通り竹釘で打ち締め、尻を野地板に丸釘止めとした。

⑧ 平 舟

舟足は1足目1.8cm、2・3足目2.4cm、以降3.0cmで葺き登った。葺き登り2足ごとに朱墨を打ち、横歩み1.5～1.8cm間隔に2通り竹釘で打ち締めた。隅・箕甲は楔形に拵えた道具板を用い、平舟足に合わせて適宜込み足を入れながら葺き廻した。

葺込銅板は始め3足目、以降10足ごとに入れ、板葺き先から3mm引っ込めて葺き込んだ。

⑨ 箱棟解体復旧

箱棟は鬼板、障泥板など葺き替えに支障する箇所を解体し、葺き上げ後、在来のとおりに復旧した。復旧にあたっては破損材を取り替えたが、詳細な補修範囲は調査のうえ決定した。



屋根1 こけら板作製作業-1
木口の詰んだサワラ原本を鉋で大割りした。



屋根2 こけら板作製作業-2
木口を見ながら板を手割りしていく。



屋根3 こけら板作製作業-3
厚さを3mmに小割りしていく。



屋根4 こけら板作製作完了
作製したこけら板の材料検査を実施した。

⑩ 箱棟銅板包み

銅板包みは厚0.4mmの定尺銅板を用い、板割りなど在来とおりとし板傍はせ掛け・釣子止めとして葺き上げた。鬼板は調査のうえ破損箇所を補修し、木口のみ厚0.4mmの銅板を用いて在来のとおり銅板包みを行った。

⑪ 幣・押殿鉄板葺、箱棟解体

幣・押殿の鉄板葺は、前回の本殿屋根葺替時に施工されたものと思われ、こけら葺上に葺き重ねられており、本殿こけら葺に支障するため一部を解体した。復旧は銅板葺として別途の押殿工事で行ったが、こけら葺を伝わって銅板葺下面に雨水が浸入しないよう雨仕舞を検討して施工した。

箱棟は本殿こけら葺に支障する範囲を解体した。復旧に当たっては別途の押殿工事として破損部分の補修を行い、銅板包みとして整備した。



屋根7 旧葺材を解体した野地の状況
野地の腐朽は軒先等の一部に限定されていた。



屋根8 旧葺材解体完了の状況
野地全面に防腐処理を施した。



屋根5 箱棟解体の状況
銅板包みを解体し、腐朽箇所を確認した。



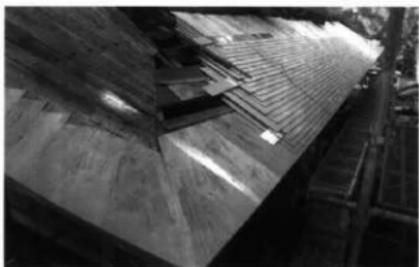
屋根9 野地補修の状況
作製したこけら板の材料検査を実施した。



屋根6 旧葺材解体の状況
表面の腐朽は内側には達していなかった。



屋根10 水切り銅板・上目板の取り付け状況
筭甲部の取り付け状況。



屋根11 脊面平葺きの詳細
防腐のために10足毎に葺込み銅板を入れた。



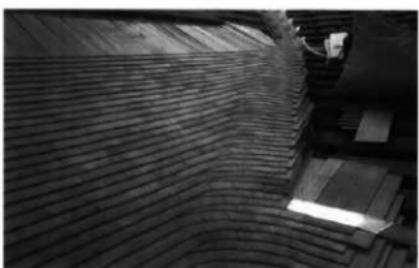
屋根15 箱棟本部補修作業
腐朽した本部は部分的に取り替えて補修した。



屋根12 脊面平葺き葺き上げ作業
まず背面平葺きから葺き上げて正面に進んだ。



屋根16 箱棟銅板包み作業
在来の形式に倣って銅板を包み直した。



屋根13 正面谷部の平葺き葺き上げ作業
幣般との取り合い部は谷崩板を入れて葺いた。



屋根17 箱棟・鬼板銅板包み完了
鬼板は在来とおりに側面のみ銅板を包んだ。



屋根14 正面平葺き葺き上げ作業
谷部と平部を葺きながら釘甲を葺き廻した。



屋根18 屋根工事完了
今後の適切な保守点検が屋根を長持ちさせる。

(5) 塗装工事

① 計画

内外の弁柄塗り、胡粉塗り、墨塗りを塗り直し、内部の扉および腰羽目板の絵画の歴除去と剥落止めの保存処置を行った。塗装の補修区分は明細を定め、詳細な調査を行い、実施計画を定めて施工した。

② 旧塗装搔き落とし

旧塗装は竹ヘラ、タワシ、刷毛などを用いて丁寧に搔き落として清掃を行い、本地の干削れの大きな箇所は埋木または刻苧剣いなどの処置をした。

③ 材料

使用した材料は下記を標準とした。

顔料……弁柄(七宝、戸田工業株式会社製)、松煙墨、上胡粉。

樹脂材……カゼイン、柿渋(内部床板、透塀他の墨塗り)

その他……本部下地処理剤：劣化面はP S N Y - 6
(寿化学社製)、通常面は礫水。塗装表面保護剤としてホルマリン水溶液。

絵画クリーニング剤…メタノール水溶液、微アンモニア水溶液。

剥落止め剤…メチルセルロース水溶液。

④ 弁柄塗り、胡粉塗り、墨塗り

弁柄塗、胡粉塗はカゼイン、墨塗は松煙に柿渋を調合し、斑のないよう2回塗に仕上げた。本地の状況に応じて、礫水引きなどの下地処理を行った。また弁柄塗りの下塗りは、塗膜の内持ちと施工性を考慮して、弁柄に対して2割り程度の光明丹を混入させた。各塗装完了後、充分に乾燥させた後、表面保護のためにホルマリン水溶液を刷毛塗りした。

⑤ 漆絵保存処置

破損状況を詳しく観察の後、個々の状況に応じて補修方法を選定した。まず柔らかい筆でゴミを払った後、水・エタノール・微アンモニア水溶液で歴除去と表面のクリーニングを行った。



塗装1 柱の旧弁柄塗り搔き落とし作業
ケレン工具により旧塗膜を搔き落とした。



塗装2 棚組物の旧弁柄塗り搔き落とし作業
サンドペーパーで旧塗膜を搔き落とした。



塗装3 顔料作製作業-1
調合した顔料にカゼイン溶液を混入した。



塗装4 顔料作製作業-2
顔料を良く搅拌して弁柄塗り液を作製した。

塗膜の剥離部分には、メチルセルロース水溶液を塗布または含浸させて平滑に圧着し、適宜アイロン鑓も使用した。屏絵の保存処置は、山頂での精密作業の困難性を考慮して、東京国立博物館内の漆工修理室内で行った（後述の施工報告書参照）。

なおこの作業によって、黒と埃をほとんど除去することができたが、黒墨によって既に変色してしまった一部の顔料は、元の状態に戻すことはできなかった。しかし全体としては鮮やかな色彩を取り戻すことができた。



塗装5 両柄塗り下塗り作業
下塗りは丹を混入して塗り上げた。



塗装8 内部両柄塗り上塗り作業
下塗り乾燥後、上塗りを塗り上げた。



塗装9 内部両柄塗り上塗りの仕上げ作業
入り口等の細部は小筆で丁寧に仕上げた。



塗装6 妻飾り懸魚の塗装作業
在来とおりに墨と両柄で塗り分けた。



塗装10 正面櫛羽目板塗装の保存処置詳細
小筆で表面のクリーニング作業を行った。



塗装7 木鼻彩色の復旧状況
具象を主に胡粉と朱と墨で像鼻を描いた。



塗装11 正面櫛羽目板塗装の保存処置全般
解体できないため現地で保存処置を行った。

(6) 屏絵保存処理施工報告書

以下に保存処置の施工を担当した株式会社小西美術工藝社の岩本元氏の執筆による、施工報告書の内容を掲載する。

① 名称等

指定区分：重要文化財

名 称：白山社奥社 本殿

部 位：正面扉・腰板

員 数：扉 6枚・腰板 3枚

法 量：扉 縦97、横47、厚4 (センチメートル)

② 修理前の所見

気候変動の激しい過酷な環境下にもかかわらず比較的良好な保存状態であったが、漆膜・金箔・彩色には亀裂・断文・剥離が随所に見られ、黒の発生も広範囲に及び、現状を放置すれば破損進行が予見される同時に大きく美観を損ねていた(写真漆絵1・2・3)。



漆絵1

剥離状況

③ 修理概要

総体的に文化財保存修復の手法による保存修理を行った。

修理にあたっては、文化財の現状維持の原則にのっとり、当初の漆膜は可能な限り損なわぬよう注意し、使用材料等は厳選した信頼性の高いものを使用した。

④ 工期

平成17年8～9月



漆絵2

黒黴

⑤ 修理内容

○修理前の写真撮影、及び詳細な修理箇所の調査を行った。

○総体にエタノール水溶液や微アンモニア水溶液を使用して清拭した。黒の除去にはエタノールを使用した(写真漆絵4・5・6)。

○漆膜や金箔の微細な剥離部分には、メチルセルロース水溶液を含浸し圧着した。圧着が困難な箇所には適宜アイロン鋸を併用した(写真漆絵7・8)。



漆絵3

白黴

【メチルセルロースについて】

膠彩色の剥落止めには通常ふのり・膠が使用されるが、本件の特殊な環境要因下では修理後の変化について再剥離や黒の発生が懸念された。

メチルセルロースは、古墳内の高湿度環境下彩色剥落止めに実績があり、本件修理に採用した。

○全体に希釈したメチルセルロース水溶液を塗布した後適度に拭き取り、修理箇所の光沢の統一と顔料や漆膜・金箔の強化を図った（写真塗絵9）。

○全体を点検し、修理後の写真撮影を行った。



塗絵7



塗絵4



塗絵8



塗絵5



塗絵9



塗絵6

⑥ 作業中判明事項

○素地は目の詰んだ針葉樹材正目接ぎ合せ板に薄く下地を施し、箔下中塗り（黒漆か透漆）に金箔を押す。

○白木素地は矧ぎ目と端喰みにコクソを剝い、漆分の少ない砥の粉状下地による引き込み地付け様の痕跡があるものの、その上に塗料が塗布された形跡がない。

当初から白本地であったと思われる。

- 図像は膠彩色技法と漆塗技法を基本に様々な手法が盛り込まれている点が特徴であり、技術的冒險心に富んだ作風と言える。

破綻のない画面構成から、単独の画工の手による印象を受ける。

- 図像の随所に銀色金属粉（錫粉？）を用いた泥の使用が認められた。

「丹青指南」（狩野派に集積された彩色技法書）には、板絵を画く際に密着性を高める為の技法として、自然銅石を混入した下地材の使用（錫泥下地）が紹介されているが、本件に見られる技法と錫泥下地との同一性は低いものと思われる。

- 腰板向かって右の獅子は緑青による彩色が認められた。

また、後世修理の際、板の一部に加工を施した痕跡が認められた（写真漆絵10・11）。

- 腰板に接した当初性の高い柱に、腰板に塗布された弁柄漆がはみ出しているのが認められた。

腰板の漆塗膜と彩色が現場施工である可能性が高いことを示唆すると思われる（写真漆絵12・13）。

- 腰板図像の塗膜剥落箇所の随所に、本地に直接画かれた墨線様の図が認められた。

現在見られる図の下書きか、別の図像、転用材かは不明（写真漆絵14・15）。

- 腰板中央の獅子に、黄漆（石黄と漆の混合）の使用が認められた。

漆が過乾燥した際に生じる、特有のちぢみ痕が見られたので、漆と見て間違いない（写真漆絵16）。

- 腰板向かって左の獅子全体に、屏絵に見られた金属粉の使用が認められた。

現状ではかなり黒色を帯びているが、当初は銀色であったと思われる（写真漆絵17）。

- 本殿正面柱に金箔の痕跡が認められた（写真漆絵18）。



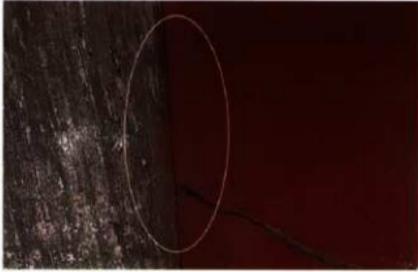
漆絵10



漆絵11



漆絵12



漆絵13



漆絵14



漆絵18



漆絵15

⑦ 使用材料

信頼性の高い素材を使用した。

無水エタノール…株今津薬品工業

アンモニア…共同組合 東葉

メチルセルロース…株和蘭画房

⑧ 修理実施場所

東京国立博物館内 小西美術工藝社修理室

(腰板は現場にて作業実施)

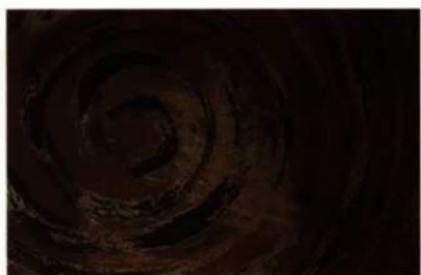
⑨ 施工者

株式会社小西美術工藝社

⑩ 修理担当者

岩本 元

福田 奈々子



漆絵16



漆絵17



漆絵19 麒麟の修理前（左）と修理後（右）



漆絵20 白虎の修理前（左）と修理後（右）



漆絵21 朱雀の修理前（左）と修理後（右）



漆絵22 玄武の修理前（左）と修理後（右）



漆絵23 青龍の修理前（左）と修理後（右）



漆絵24 白澤の修理前（左）と修理後（右）



漆絵25 西脇間屏表面の修理前



漆絵26 西脇間屏表面の修理後



漆絵27 鶴鱗の細部クリーニングの修理前（左）と修理後（右）



漆絵28 鶴鱗の細部剥落止め修理前（左）と修理後（右）



漆絵29 朱雀の細部白羽除去の修理前（左）と修理後（右）



(7) 雜工事

① 基壇石積修整

基壇石積みおよび土留石積みの破損箇所を積み直した。解体にあたっては現状の石材の位置を記録し(写真及び見取り図)、各石に番付、基準線などを記したうえ、地盤を掘削して取り外した。

復旧にあたっては碎石地業(厚10cm)のうえ、根石を旧位置に据え付けてモルタルで根巻きを行い、それより上は在来のとおりに石積みを行った。その際、石の合端には極力詰め石を入れず、入れた場合でも詰め石が合端から見えないように奥に引っ込めて、できるだけ在来の石積みの形状を再現した。

② 上端石修整

東面石積の後半部は、石積の上端石が移動していたため、取り外して旧位置に積み直した。

③ 柱礎石レベル調整

本殿西南隅隣石は若干の不同沈下が見られたので、レベルを他の石に合わせて鉤石によって調整した。

④ 防蟻土壤処理

イ. 薬 剤

土壤処理剤…日本シロアリ対策協会認定品とした
(トヨーピレス乳剤)

ロ. 工 法

本殿基壇内側の地盤全面を処理した。土壤処理は乳剤散布とし、散布は1mあたり液剤で4~5リットルを処理した。

⑤ 修理銘札

銅板(巾2.5cm×長18cm×厚1.5mm)に修理年号・修理種別を陰刻し、本殿内陣中央間正面頭貫の見返し面に銅鋸打ちに取り付けた。

⑥ 清掃・後片付け

工事完了後、仮設物跡地を整地し、工事区域内の残材などを搬出し清掃した。不用材の処理については関係法規に従って適切に処理を行った。



雑工1 基壇石積み据え直し作業
水平を合わせている状況。



雑工2 西側基壇石積み据え直し作業
出入りのないよう調整している状況。



雑工3 西側基壇石積み据え直し完了
在來の石を再用して本來の形状に復旧した。



雑工4 西側基壇石積み上面整地完了
不要土を鋤き取って平滑に整地した。



雑工5 東側基壇石積みの現状記録作業
解体前に高さ・傾斜等の主要寸法を計測した。



雑工9 東側基壇石積みの据え直し完了
表面にモルタルがはみ出さないよう注意した。



雑工6 東側基壇石積みの番付付け作業
在来石に番号を付けて写真等の記録を取った。



雑工10 防蟻土壤処理作業
本殿床下と基壇内地盤を薬剤処理した。



雑工7 東側基壇石積みの底部地固め作業
部分解体しながら順次据え直しを行った。



雑工11 修理銘札作製
「屋根葺替・塗装及び部分修理 平成十七年九月」と陰刻。



雑工8 東側基壇石積みの据え直し作業
記録した旧形状を基に、調整して据え直した。

(8) 資材運搬

① 計画

本段は風越山(1,535.1m)の山頂付近にあって資材の搬入が困難なため、ヘリコプターによる資材の運搬を行った。搬送資材は仮設材、工事用資材、作業員の工具、食料など工事に必要な資材全般とした。空輸は飯田市のグランドをヘリポートとして使用し、随身門脇の空地を荷下ろし場とした。

ヘリコプターの使用回数(飛行場から飯田市まで)は1月1回の割合で合計5回、延べ6日間となり、1回の使用当りで荷揚げから荷下ろしまで10往復程度として輸送を行った。また各工事の作業員は現地で宿泊して作業を行ったため、保存の利かない食料や発電のための燃料などは、必要な都度、人力により輸送を行った。



運搬1 資材運搬の準備作業
吊り上げやすいようにネットで梱包した。



運搬2 資材運搬のヘリコプター
重量1t吊りの大型機をチャーターした。



運搬3 資材吊り上げ作業
準備した資材を迅速に山上に運んだ。



運搬4 資材吊り降ろし作業
空中で停止しながら慎重に吊り降ろした。



運搬5 荷下ろし場からの運搬作業
搬入資材は迅速に運搬しなければならない。



運搬6 石段での運搬作業
隨身門を潜って急な石段を登って運んだ。

(9) 赤外線写真撮影委託

① 計画

屏に描かれた漆絵の保存処置を講じるに当たり、適切な処置方法を探るために赤外線写真撮影を行い、下地工法や下絵の有無の調査を行った。撮影は屏漆絵の保存処置の時期に合わせて、東京国立博物館内の漆工修理室内で行った。

② 写真撮影

可視光や赤外線などを被写体に照射して、赤外線撮影とカラー赤外線撮影をデジタルカメラによって画像化した。

③ 調査結果

以下の表に示すとおり。

対象	撮影結果		
	内 容		
屏漆の下絵等の有無	屏絵などに施される箔の厚さは通常1/10,000mm～3/1,000mmであると考えられる。そのため、長波光である赤外線を照射した場合、赤外線は金箔を透過し、金箔下に墨等で書かれた絵柄や文字を赤外線撮影によって写し出すことが可能である。今回の撮影調査を行った結果、6枚の屏絵の表裏とともに、現在残存している絵柄以外に下絵または別の絵柄等は確認できなかった。また、屏裏の金箔が薄くなつた場所下に下地漆である黒漆と思われる反応があるのを確認できた。黒漆も墨等のカーボンも赤外線撮影では同じ黒反応色で写し出され区別がしにくいため、成分の違う顔料等をそれぞれの赤外線反応色の濃淡や色彩で判別がしやすい。カラー赤外線撮影を併用して調査を行った。以上の調査方法によつて総合的に画像抽出を行つたが、文頭に書いとおり、別の絵柄や下絵らしき反応は認められなかつた。		
絵表	6枚の屏絵表には、部分的に黒漆の痕の様な反応色が見られる。しかしながら屏表全体を観察すると、その痕跡は僅かであるため、黒漆を施していたとは推定しがたい。また、赤外線撮影とカラー赤外線撮影で得られた結果、幕の紐と房の分に朱と類似した反応色が認められる。詳しくは屏絵裏の内容で述べる。		
絵裏	赤外線撮影とカラー赤外線撮影で得られた結果で、6枚の屏絵で共通した特徴としては、赤色を使用した色彩には金や銀のような金属の反応色（白色系が主体の反応色）が抽出された。これは水銀を使用した朱の特徴と考えられる。ベンガラの場合、同じ金属類でも酸化鉄などであり、反応色は黒色系（赤黒い色）である。		
その他	屏上部に墨書き文字が確認できた。墨成分の残存量が少ないので抽出された反応色は薄く写し出された。詳細は下記のとおりである。		

撮影結果（墨書き）				
対象		画像番号	墨の残存状況	文字の内容（判読は推定）
分類I	分類II	画像No.		
赤外線撮影	玄武	玄武IR墨書き10・12	悪い	南
赤外線撮影	玄武	玄武IR墨書き11・13	悪い	(不明)
赤外線撮影	朱雀	朱雀IR墨書き10	可	中・(不明)・上
赤外線撮影	朱雀	朱雀IR墨書き11	可	中
赤外線撮影	朱雀	朱雀IR墨書き12	可	(不明)・上
赤外線撮影	青龍	青龍IR墨書き09	悪い	北・北
赤外線撮影	青龍	青龍IR墨書き10～11	悪い	北
赤外線撮影	青龍	青龍IR墨書き12	悪い	北
赤外線撮影	白虎	白虎IR墨書き10～11	可	上・中
赤外線撮影	白澤	白澤IR墨書き09	悪い	北・上
赤外線撮影	白澤	白澤IR墨書き11～12	悪い	(不明)
赤外線撮影	白澤	白澤IR墨書き10	悪い	北
赤外線撮影	麒麟	麒麟IR墨書き11	悪い	(不明)
赤外線撮影	麒麟	麒麟IR墨書き09～10	悪い	上・西
赤外線撮影	麒麟	麒麟IR墨書き12	悪い	上・西

赤外線写真撮影委託：

有限会社 三井考測
撮影者、報告書作成：

代表取締役 三井 猛

※上記撮影結果は委託業務報告書から抜粋して編集した。



赤外1 運搬前の事前調査作業
破損箇所等の現状を詳細に調査・記録した。



赤外5 赤外線撮影の事前調査作業
赤外線撮影の効果を確認した。



赤外2 届梱包作業 - 1
美術品梱包用の紙と綿等で慎重に梱包した。



赤外6 届の赤外線撮影作業 - 1
特注赤外線撮影用デジタルカメラで撮影した。



赤外3 届梱包作業 - 2
糞生が外れないようひもで丁寧に縛った。



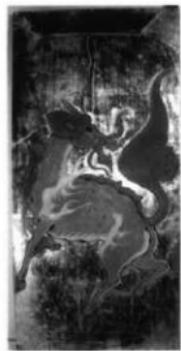
赤外7 届の赤外線撮影作業 - 2
全体から細部まで詳細に撮影した。



赤外4 届梱包作業 - 3
特注の木箱を作製して二枚ずつ梱包した。



赤外8 届の赤外線撮影作業 - 3
裏面だけでなく表面も詳細に撮影した。



赤外9
麒麟の赤外線画像全体



赤外10 麒麟の赤外線画像詳細
下絵や墨書きは見付けられなかった。



赤外11
白虎の赤外線画像全体



赤外12 白虎の赤外線画像詳細



赤外13
朱雀の赤外線画像全体



赤外14 朱雀の赤外線画像詳細
尾羽に朱が使用されていることが判明した。



赤外15
玄武の赤外線画像全体



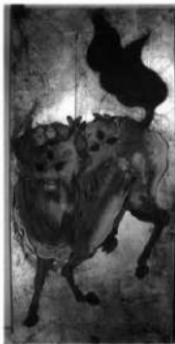
赤外16 玄武の赤外線画像詳細
目に朱が使用されていることが判明した。



赤外17
青龍の赤外線画像全体



赤外18 青龍の赤外線画像詳細



赤外19
白澤の赤外線画像全体



赤外20 白澤の赤外線画像詳細
下地に錫や真鍮等の金属粉の使用が判明した。

第2節 飯田市有形文化財 白山社奥社幣・拝殿

第1項 破損状況

屋根平葺の修理前は鉄板葺だが、錆が生じて全体が摩滅していた。軒付は部分的に腐朽が見られた。野地は全面的に緩みが見られ、腐朽も部分的に生じていた。木部は土台、柱足元、板壁などの腐朽しており、拝殿の床は緩みや腐朽が見られた。東面の木階は腐朽していた。

塗装は内外部の弁柄塗りが全体に褪色・劣化していた。

建具は框と板が部分的に傷んでおり、緩みを生じていた。

その他、周囲の雨落石は乱れていた。

第2項 修理方針

屋根葺替・塗装及び部分修理(木部ほか)。

鉄板葺とその下のこけら葺は撤去して、新たに銅板葺に葺き替えた。軒付は腐朽箇所を積み直す他は、できる限り再用した。

野地は全面的に補修して防腐剤処理を施した上、銅板葺の下地に整備した。

木部は土台、柱根、床下板壁、正面と側面の木階等の補修を行った。

塗装は内外部の弁柄塗りを塗り替え、内部の金箔押を補修した。

そのほか周囲の雨落石は補足して据え直しを行い、建具を補修した。

第3項 工事実施仕様

(1) 通 則

① 総 則

この仕様書は概要を示すものであって、記載外の事項または疑問を生じた場合はすべて主任技術者の指示に従い施工した。なお実施にあたっては、さらに詳細な実施仕様を定めて施工した。

工事発注時において、図面及び特記仕様書に記載されていない事項は、すべて『建築工事共通仕様書』(国土交通省営繕部監修 最新年度版)に準拠した。

② 材料検収

工事に使用した一切の材料は、検査員が検査を行い合格したものを使用した。

③ 材料保管

使用した材料で検査員の検査に合格したものはすべて良好な状態で保管し、湿気・盜難・火災に対し十分な対策を講じた。



破損1 屋根鉄板葺きの破損状況
全体に剥げて表面は摩滅していた。



破損2 拝殿床下の破損状況
大引きと束は腐朽していた。



破損3 外部塗装の劣化状況
弁柄塗りは剥落が著しく、木肌が露出していた。

(2) 板設工事

① 計画

建物周囲には軒足場を建設し、屋根面は葺き替え期間中、雨漏りなどを生じさせないようシートで覆い養生を行った。そのほか境内の随身門脇の空地を整地して作業員休憩所兼倉庫、仮設便所などを設置した（本殿工事のものと調整を図った）。

② 構造

軒足場は単管組とした。

休憩所兼倉庫はユニットハウスとした。仮設便所は汲み取り式とした。

③ 材料

イ、軒足場の主材は下記を標準とした。

単管……外径48.6mm、肉厚2.4mm、S T K 500。

同上付属品…ベースプレート、ジョイント、直交・自在在ランプ。

足場板……鋼製踏板。

敷板……足場用合板、幅240mm×長4,000mm。

鉄線、釘……10#なまし鉄線、洋釘など。

ロ、作業員休憩所兼倉庫はユニットハウスとし、便所は据え置き式簡易トイレとした。

④ 軒足場

建地は敷板上にベースプレートを釘止めし、軒先より外に柱間1.8m内外に建てた。布は根摺みのうえ、飛び付き1.8m内外、それより上は1.2m内外に取り付けた。棚は軒先より0.9m下に設け、鋼製踏板を組んだ。要所に控柱や筋道を入れて補強した。

⑤ 屋根面シート養生

葺き替え期間中は雨漏りなどのないよう屋根全面をシートで覆い養生を行った。

⑥ 危険樹木枝払い

幣拝殿の上方に被さる樹木の腐朽した枝は、落下して建物に損傷を与える恐れがあったため、15本を枝払いした。処理した枝は、安全な方法で処分した。

⑦ 危害防止

工事実施にあたり法規上必要な危害防止および衛生上のことに関しては適当な施設を設けた。また仮設物の安全管理に対しては工事期間を通じて十分な配慮を行った。各仮設物内には消火器を常備し、危害防止のため表示板などを掲げた。



仮設1 軒足場建設状況
本殿の足場と一緒に立てた。



仮設2 軒足場建設完了
周囲は状況に応じてシートで養生した。

(3) 木工事

① 計画

本部は土台、柱根、床下板壁、正面と側面の木階等の補修を行った。

補修方法、補修材料については本殿工事に準じて施工した。なお詳細な補修範囲については、調査のうえ実施計画を立てて施工した。

② 再用材

在来材は将来の保存に支障のない限りつとめて再用した。

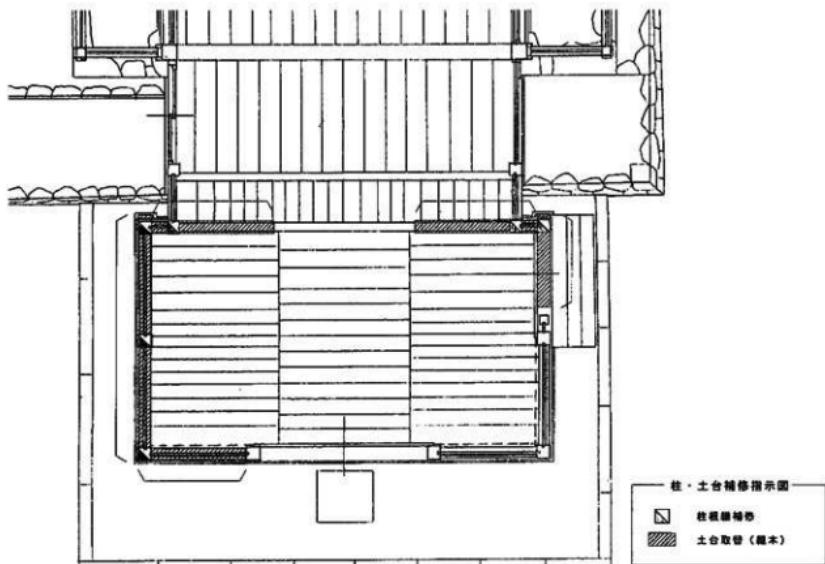


図1 木工事概要図－1

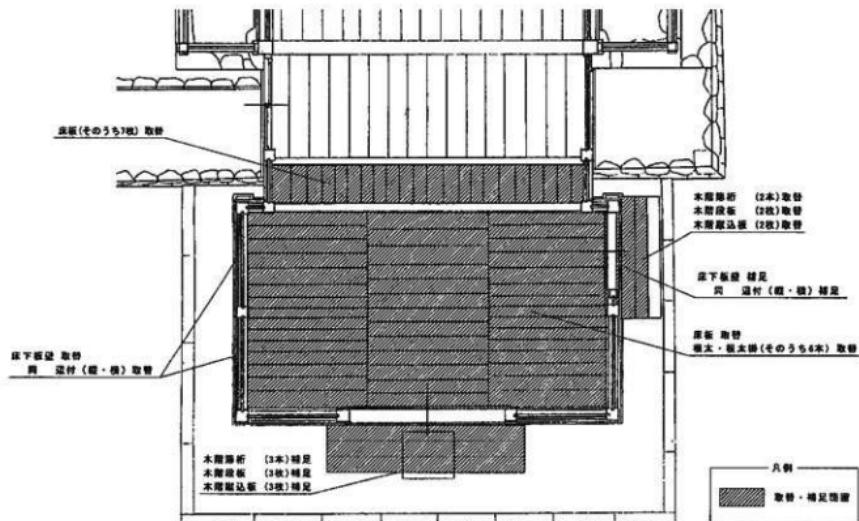


図2 木工事概要図－2

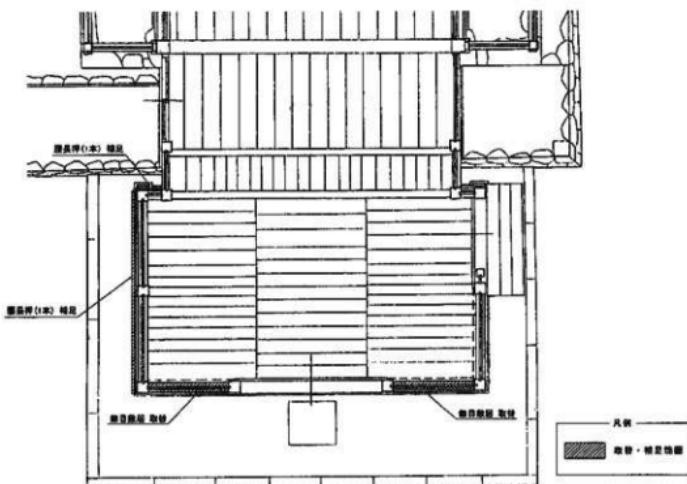


図3 木工事概要図-3

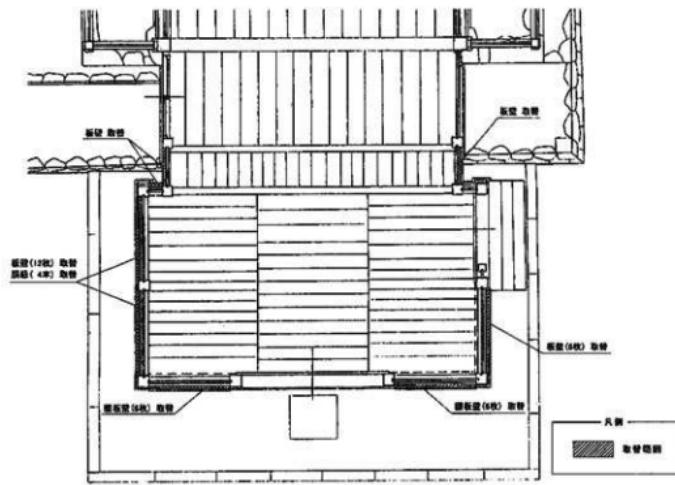


図4 木工事概要図-4

③ 取替材

取替材は原則として在来材と同種材・同品位以上とし、旧形・旧工法を踏襲した。すべて赤身乾燥材とし、化粧材のうちとくに板類は必要に応じて現場で2箇月以上自然乾燥させた。

④ 鉄材

在来品に倣うことを原則とした。ただし見え隠れに使用する釘・金物はJIS規格品を使用した。和釘は鍛鉄製とし、補強金物など規格外のものについては主任技術者の指示によりその都度作製した。

⑤ 繕 い

埋木・矧木などの繕いを行った。接着剤は構造的強度を要する箇所はエポキシ系とし、埋木・矧木は酢ビ系を用い、必要に応じて見え隠れに忍釘止めを行って補強した。

⑥ 新材加工

継手・仕口・曲線などは在来のとおりに加工した。柱など軸部の化粧部分は、在来の表面加工を調査のうえ補足材も同様の加工とし、外部に面する箇所はさらには風食肌に拘えた。

⑦ 烙印押

取替材および新規補足材は、すべて見え隠れに修理年号を刻した烙印を押した。

⑧ 木部防腐・防蟻処理

イ. 薬 剤

床組材用：財團法人文化財虫害研究所認定品(キシリヤン・ラモントラッド、日本エンパイラケミカルズ社製)

外部腰回り用：同上、塗装部材にも施工可能薬剤(キシリヤン3W、同上)

ロ. 施工範囲

本殿および幣殿取り合い部床組材(今回の解体範囲)。塗装を行う外部の腰長押から下方部材。

ハ. 工 法

塗布または吹き付けとし、薬剤は1m²(木材表面積)あたり0.2リットル以上を処理した。塗装面の防腐・防蟻処理は、念のために1週間以上の乾燥を図った後に、塗装工事に当たるようにした。

⑩ 組立および補強

解体した範囲は、各部材の補修および加工完了後、在来または当初の仕様により取り付けたが、当初材の胴付きなど建物の基幹寸法の要所となる箇所は切削を行わないよう注意した。なお、構造上不完全と認められる部分は、添木・金物などにより補強を講じた。



本工1 補足木材の納品状況
所定寸法に挽き立てた木材の検査を実施した。



本工2 拝殿足元補修作業
腐朽した土台と床組を取り替えた。



本工3 軸部補修作業
拝殿西側に現地加工場を設定して作業した。



本工4 拝殿柱足元補修状況
腐朽した柱足元は金輪車ぎで根離ぎした。



木工5 木材加工作業
床組と造作を加工している状況。



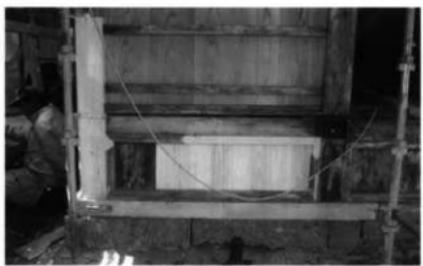
木工9 野地補修完了
銅板葺き下地としてべた張り野地に整備した。



木工6 軸部・造作補修完了
西面の後補の横板張りは撤去した。



木工10 正面木階組み立て作業 - 1
柱に残るほぞ穴を基にして整備した。



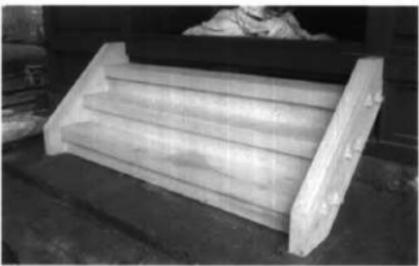
木工7 正面足元羽目板の補修状況
周囲の樋は継ぎ木し、羽目板も一部再用した。



木工11 正面木階組み立て作業 - 1
補強のために中間にも節桁を置いた。



木工8 小屋組補修状況
弛緩していた小屋組は添え木等で補強した。



木工11 正面木階組み立て完了
形式は洋般の使い勝手を考慮したものとした。

(4) 屋根工事

① 計画

鉄板葺とその下の旧こけら葺は撤去して、新たに銅板葺に葺き替えた。軒付は腐朽箇所を積み直す他は、できる限り再用した。野地は全面的に補修して防腐剤処理を施した上、銅板葺の下地に整備した。

② 旧葺材解体処分

平葺・品軒積の全面、上軒付・下軒付の一部、及び鉄板葺を解体した。解体は丁寧に行い、とくに軒付の解体は再用する軒付を破損しないように注意した。解体した葺材は順次場外に搬出して処分した。

③ 箱棟解体・復旧

箱棟は破損が著しいため、すべて解体し、材料を取り替えて旧来どおりに復旧した。

④ 野地補修及び整備

平葺解体後、破損部分を補修し、全面に防腐剤を塗布または散布した。また新たに銅板葺するために、新規垂木や野地板張りなど必要な下地を整備した。さらに、本巣こけら葺と銅板葺の取り合い部については、要所に水返しを設けるなど雨水の浸入のないよう処置を講じた。

⑤ 材料

使用した材料は下記を標準とした。

軒付裏板……巾巾15cm以上、厚2.4cm、長30cm、サワラ赤身材

積板……巾巾9cm以上、厚1.2cm、長15cm、サワラ赤身材、手割り板

上目板……巾巾9cm以上、厚0.75cm、長30cm、サワラ赤身材、手割り板

竹釘……3.6cm、焙煎品

水切銅板……定尺判、厚0.4mm、幅9cmに切断し、水切に加工したもの

平葺・箱棟銅板……定尺判、厚0.4mm。

下葺材……砂付ルーフィング(JIS A 6005 3500)

鋼釘……14#平頭、長3cm

丸釘……JIS規格品



屋根1 箱棟解体作業
腐朽は木部まで及んでいた。



屋根2 鉄板葺き解体作業
鉄板は錆が甚大で層状に剥離する状況だった。



屋根3 鉄板葺き及び下地解体完了
鉄板葺きと旧こけら葺きをすべて解体した。



屋根4 軒付け積み解体状況
健全部は存置して、腐朽箇所を解体した。

⑥ 軒付積

裏板は在来の出に倣い、尻手に水垂れ棟を打ち、板両傍を削り合わせて竹合釘を入れ、鼻先の通り良く前後2通り洋釘で打ち止めた。積板は在来の投げ勾配に合わせて加工し、板傍をなじみよく合わせて千鳥に積み、1枚ごとに横歩み1.5~1.8cm間隔に2通り竹釘で打ち締め、順次、隅反増しなど格好良く積み上げ、木口は在来の投げ勾配に合わせ鉋削り仕上げとした。

なお再用した軒付木口面は微の付着によって縁変していたので、鉋削りによって微と劣化した木部表面を取り除いた。



屋根5 軒付け積み補修完了
軒反りの線が通るよう調整して積み直した。

⑦ 上目板、水切銅板

水切銅板は軒付檜上に在来の出に合わせて銅釘で打ち止めた。上目板は2枚重ねとし、横歩み1.5~1.8cm間隔に2通り竹釘で打ち締め、尻を野地板に丸釘止めとした。



屋根6 本殿屋根取り合い部の納まり状況（右が本殿）
こけら葺と銅板葺の境に銅板を立ち上げた。

⑧ 下葺

野地に防腐剤塗布後、砂付ルーフィングを軒先より敷き始め、重ね幅は長手200mm以上、幅方向100mm以上原則とするが、メーカー指定のある場合はそれを優先した。ルーフィングの弛みやしわの生じないように敷き込み、ステップル止めとした。



屋根7 砂付ルーフィング敷き作業
銅板葺きの間に強い砂付きの下葺き材とした。

⑨ 銅板平葺

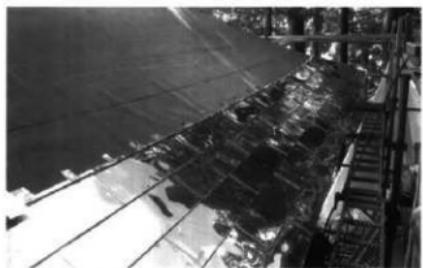
定尺銅板を四つ切り以上に裁断・加工し、四周にハゼ折り（上ハゼ15mm、下ハゼ18mm）とし、葺上げはハゼを均一に掛け合わせる吊り子は葺板1枚に付き2個以上とし、下はハゼ掛け、下地に吊り子止めとした。釘は25mm以上の鋼平頭釘を吊り子1枚に付き1本止めを標準とした。隅は廻し葺とし、廻し葺板のハゼが必ず上ハゼとなるように葺き上げた。



屋根8 銅板平葺き作業
定尺銅板を四切りに加工して葺き上げた。

⑩ 箱棟銅板包み

銅板包みは厚0.4mmの定尺銅板を用い、板割りなど在来とおりとし板傍はせ掛け・釣子止めとして葺き上げた。鬼板は調査のうえ破損個所を補修し、木口のみ厚0.4mmの銅板を用いて在来のとおり銅板包みを行った。



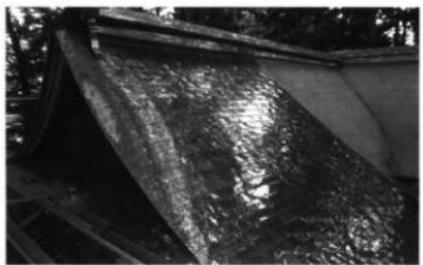
屋根9 鋼板平葺き状況
周囲にハゼ折りを付け、吊り子2個止めとした。



屋根10 上部の鋼板平葺き作業
屋根面足場を組みながら葺き上げた。



屋根11 裝甲部の鋼板平葺き作業
装甲の曲線に馴染ませて葺き上げた。



屋根12 屋根工事完了
箱棟と鬼板は本般箱棟と取り合わせて包んだ。

(5) 塗装工事

① 計画

内外の弁柄塗、胡粉塗、墨塗を塗り直し、内部の金箔押しを補修した。塗装の補修区分については明細を定め、実施にあたっては詳細な調査を行い、実施計画を定めて施工した。

② 旧塗装搔き落とし

旧塗装は竹ヘラ、タワシ、刷毛などを用いて丁寧に搔き落として清掃を行い、木地の干割れの大きな箇所は埋木または刻芋飼いなどの処置をした。

③ 材料

使用した材料は下記を標準とした。

顔料……弁柄（七宝）、松煙墨、上胡粉。

固着材……カゼイン、柿渋。

金箔……3号色、10.9cm角

その他の……膠（三千本）、木部下地処理剤：劣化面はP S N Y - 6（寿化学社製）、通常面は碧水。塗装表面保護剤としてホルマリン水溶液。

④ 弁柄塗、墨塗

弁柄塗はカゼイン、墨塗は松煙に柿渋を調合し、斑のないよう2回塗に仕上げた。本地の状況によっては碧水引きなど下地処理を行った。また弁柄塗りの下塗りは、塗膜の内持ちと施工性を考慮して、弁柄に対して2割り程度の光明丹を混入させた。

各塗装完了後、充分に乾燥させた後、表面保護のためにホルマリン水溶液を刷毛塗りした。

⑤ 金箔押し

下地塗装の上に膠を斑なく塗り、金箔をしづの生じないように丁寧に押した。



塗装1 軒の旧弁柄塗り搔き落とし作業
劣化状況に応じて工具を使い分けた。



塗装2 外部弁柄塗り下塗り状況
本殿同様に丹を混入して塗り上げた。



塗装3 外部弁柄塗り上塗り状況
本殿同様に丹を混入して塗り上げた。



塗装4 内部弁柄塗り上塗り作業
板戸と窓も同様に弁柄塗りに塗り上げた。



塗装5 内部弁柄塗り仕上げ作業
細部は小筆で丁寧に仕上げた。



塗装6 正面妻飾り塗装状況
残存塗料を基に墨と弁柄で塗り分けた。



塗装7 水引虹梁上かえる股の彩色状況
僅かな残存資料から群青と金箔を復原した。



塗装8 水引虹梁上の渦と若葉の状況
以前は墨差しが線で描かれた可能性があった。

(6) 雜工事

① 基壇石積みの解体作業

基壇石積み及び土留石積みの破損箇所を積み直した。解体にあたっては現状の石材の位置を記録し、各石に番付、基準線などを記したうえ、地盤を掘削して取り外した。復旧にあたっては碎石地業（厚10cm）のうえ、根石を旧位置に据え付け裏側にモルタルを充填して固定し、それより上は在来のとおりに石積を行った。



雑工1 基壇石積みの解体作業
通りの乱れた箇所を解体した。

② 上端石修整

東面石積の後半部は、石積の上端石が移動しているため、取り外して旧位置に積み直した。

③ 防蟻土壤処理

イ. 肥 液 剤

土壤処理剤…日本シロアリ対策協会認定品とした
(トヨービレス乳剤)

ロ. 工 法

幣拝殿内側の地盤全面を処理した。土壤処理は乳剤散布とし、散布は1m²あたり液剤で4～5リットルを処理した。



雑工2 基壇石積みの底部地固め作業
地盤を充分に突き固めた。

④ 修理銘札

銅板（巾2.5cm×長18cm×厚1.5mm）に修理年份・修理種別を除刻し、拝殿水引虹梁上の小壁板の見返し面に銅鋸打ちとした。



雑工3 基壇石積みの碎石敷き作業
地業は砂石を敷いて充分に突き固めた。

⑤ 清掃・後片付け

工事完了後、仮設物跡地を整地し、工事区域内の残材などを搬出し清掃した。不用材の処理については関係法規に従って適切に処理を行った。



雑工4 基壇石積みの据え付け状況
不陸・出入りのないようモルタルで据え付けた。



雑工5 基礎石積み補修完了
周囲と内側土間は地盤の整地を行った。



雑工6 正面扉の補修状況
腰の桟を取り替えて弛緩部は締め直した。



雑工7 正面窓板戸扉の補修状況
襻材と羽目板を取り替えて補修した。



雑工8 修理銘札作製
本殿と同様に作製した。

(7) 資材運搬

① 計画

本殿の資材運搬に使用したヘリコプターを利用した。搬送資材は仮設材、工事用資材、作業員の工具、食料など工事に必要な資材全般とした。搬送回数は本殿の搬送回数と同じく5回となった。また本殿工事と同様に、不足に備えての燃料や保存の利かない食料などは必要な都度、人力により輸送した。

第Ⅳ章 研究事項

第1節 扉絵について

平成17年8月31日に、白山社奥社本殿扉絵が修理のために東京国立博物館本館地下の小西美術工藝社漆工芸品作業場に持ち込まれた。その際に、扉絵を実見する機会を得たので、その折の所見を簡単に述べたい。

第1項 図 様

白山社奥社本殿の身舎正面の扉絵は、東の間、中央の間、西の間にそれぞれ2面ずつ、併せて6面ある。東の間、中央の間、西の間とも、表面に幔幕と総角（あげまき）が描かれ、裏面（内面）に6体の神獣が描かれている。その図様の詳細は以下の通りである。

（1）白澤（東の間、東側）

獅子に似た神獣で、よく人語をあやつると言われる。本図では、頭部は人面に似るが、3目を有し、6本の角をもち、鬚を蓄え、額に宝珠を頂いている。体側にも3目を有し、尾は獅子のそれに似ている。体部の背は青く塗られ、体毛を表し、腹は赤く塗られている。

（2）青龍（東の間、西側）

四肢それぞれに3爪をもつ龍が上昇する様子を表わしている。頭部や鱗を有する背部は青く塗られ、腹は赤く塗られている。

（3）玄武（中央の間、東側）

玄武は本来、亀と蛇が絡んだ姿に表される事が多いが、本図の場合には単なる亀に表されている。亀甲文様を表した甲羅を負い、頭と前脚を出して泳ぐ姿である。長寿の亀を意味するのか、尾に長い毛の房があり、後脚はそれに隠れている。甲羅や体の背部は青く、腹は赤く塗られている。

（4）朱雀（中央の間、西側）

鳳凰は、四神のひとつとして表現される時には朱雀と呼ばれる。本図では、鳳凰が翼を広げ、下へ向かって飛翔する様子が描かれている。とさかや頬、首、脚、尾部は赤く塗られ、羽根は青く塗られている。上尾筒

部の羽根は、あたかも孔雀のそれのように眼状斑がある。

（5）白虎（西の間、東側）

虎が、あたかも相手を威嚇するかのように背を高く持ち上げた姿に描かれている。背は青く塗られ、黒い縞がある。腹は赤く塗られている。

（6）麒麟（西の間、西側）

麒麟は、『説文解字』によれば、犧の体と牛の尾をもつと言う。本図では、やや長い首を持ち、それを後方に向けている。頭部と背に毛の房をもち、頭頂に1角、鼻の両脇に1本ずつの鬚を有している。尾は白澤と同様に獅子のそれを連想させる。背は灰青色に塗られ、体毛が描かれ、腹や首の内側、脚の裏側は赤く塗られている。両脚の付け根部分には、揺らめく炎状の表現がある。

以上が神獣の図様である。四神を中心に、その左右に麒麟や白澤を配する珍しい構成であるが、四神の表現は、例えば玄武が単なる亀になっているように、伝統的であるとは言い難い。また、四神は、本来は中国の五行説に従って、固有の方位と色が決められているが、本扉の場合には、六面の神獣がほぼ東西方向の一線に並べられているために、方位と実際の配置が一致していない。とはいっても、東方に東の青龍、西方に西の白虎を配し、その間に南の朱雀（鳳凰）と北の玄武を挟むという配置は、一応は方位に配慮しているとは考えられないだろうか。しかし、色については、名前通りの配色とは言い難く、配感があったとは言えない。

なお、身舎正面の腰壁3面には、それぞれ獅子が描かれている。それらの表現の特色に関しては、扉絵とはあまり差が感じられない。腰壁の方がやや剥落が進んでいるが、輪郭線の打ち込みの具合や、線の肥痩には共通するものがあり、ほぼ同時の製作と考えてよからう。制作者が同じであったかどうかについては、判定しがたい。

第2項 彩 色

屏絵の彩色には、顔料と彩漆（いろうるし）が併用されている。彩漆とは、漆に顔料を混ぜて作ったもので、それで描いた絵を漆絵と呼んでおり、かなり工芸的な技法といえよう。筆者は、当初、漆絵の部分は補彩ではないかと疑っていたが、小西美術工藝社が行った赤外線撮影等の結果を拝見すると、漆絵部分の下には、別な輪郭線や彩色の痕跡は見られず、多分、当初から彩漆と顔料が色料として等価に使われたと考えられる。また、彩漆の彩度を使い分けた箇所も見られる。例えば、麒麟の図では、漆絵の赤に2種類があり、前脚や後脚の裏側の腹取りに使用された赤と、両脚の付け根に表された炎状の赤とは、色合いが異なっている。一般に、顔料で彩色した部分には光沢がなく、やや沈んで見えるのに対して、漆絵部分には明らかに光沢があり、その対比が絶妙な効果を生み出して、画に一種の精気を与えている。神獣の背景の金色部分は、黒い漆地に金箔を貼ったものである。現在はその金箔が退色した箇所が少なくない。

第3項 制作年代と作者

白山社奥社本殿に關わる棟札が多く残されており、その中に、画工や塗師に関する記述が見られるものがある。宝永元年（1704）の棟札には「画工 近藤一齊」、享保16年（1731）の棟札には「画工／原市左衛門満仙／柴田佐弥太勝重」、明和元年（1764）の棟札には「画工 狩野弟子文長／塗師 箕瀬伊右衛門」の記述がある。目下、これらの画工や塗師について詳細を明らかにできていない。白山社奥社本殿は、やはり棟札等から室町後期、永正6年（1509）の建立と考えられているが、屏絵はその画風等から判断して同時代の制作とは考えられない。昭和15年に刊行された国宝白山社本殿修理事務所編『国宝（重要文化財）白山社奥社本殿修理工事報告書』には、「現存屏風下、腰板等等の漆絵は、此時に完成されたものであろう」（21頁）と記されており、筆者もその説は妥当であると考える。制作の年代は、18世紀初め頃と考えてよかろう。

これら6面の屏絵は、四神と白澤、麒麟を組み合わ

せた珍しい構成をもつ点、顔料と彩漆を併用して彩色した点に特徴があり、製作年代や作者、図像の意味するところなど、まだ解明すべき点が多く残されてはいるが、この地域における信仰の状況や歴史の解明にとって貴重な資料であることは間違いない。

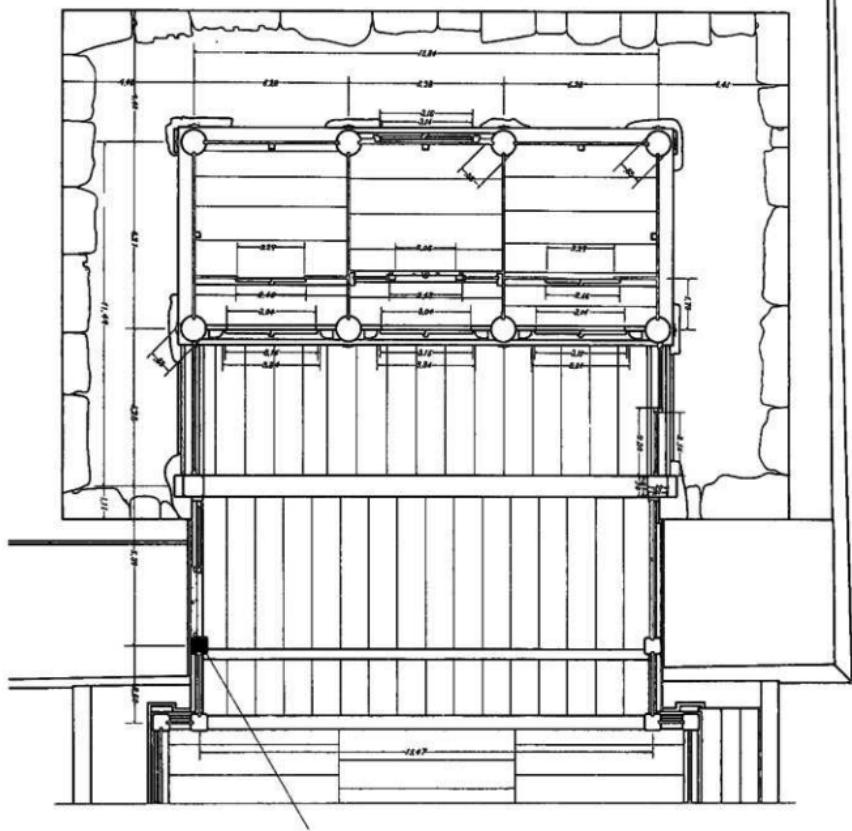
第2節 新発見の墨書について

塗装工事において、旧弁柄を除去する過程で、墨書が発見された。位置は幣殿南西側柱（図中墨塗箇所）の内側である。そのため、その部分は旧弁柄の除去と再塗装を実施しないこととし、弁柄塗りを施した板材を被せ保存することとした。

墨書の保存を優先させ旧弁柄を残したために、隠れている部分があること、作業の中で除去されてしまった部分もあることから、完全には判読できなかったが、下記の部分が確認できる。

不鮮明であるが、享保十六年と読むことができる。幣押殿の建立と同一年であることから、幣押殿建立にあたり、大般若理趣会を行なったものと推察されるが、その他は不明である。

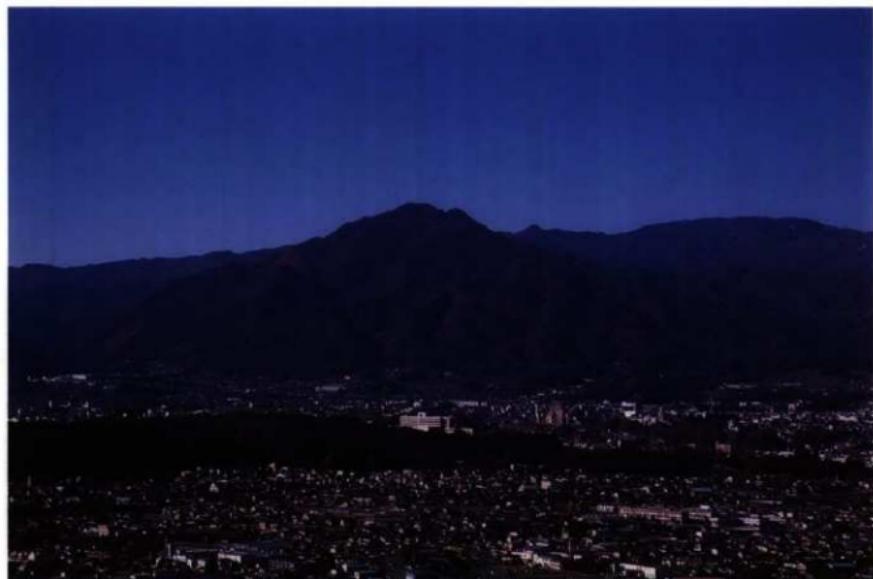
(梵字)	
□	享保十六
詞吉辰	讀誦大般若理趣
謹人	□
口	口
樂	災
：	□



免見墨書

免見墨書位置圖

写 真 図 版



風越山遠景

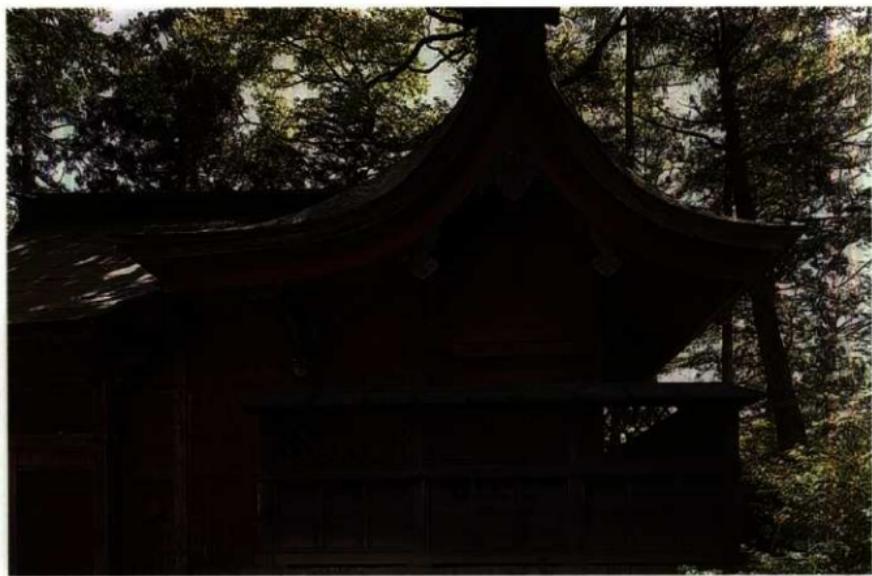


白山社絵図（岩戸久義氏藏）

图版 2



修 理 前



同 本殿侧面



修理前 本殿内部



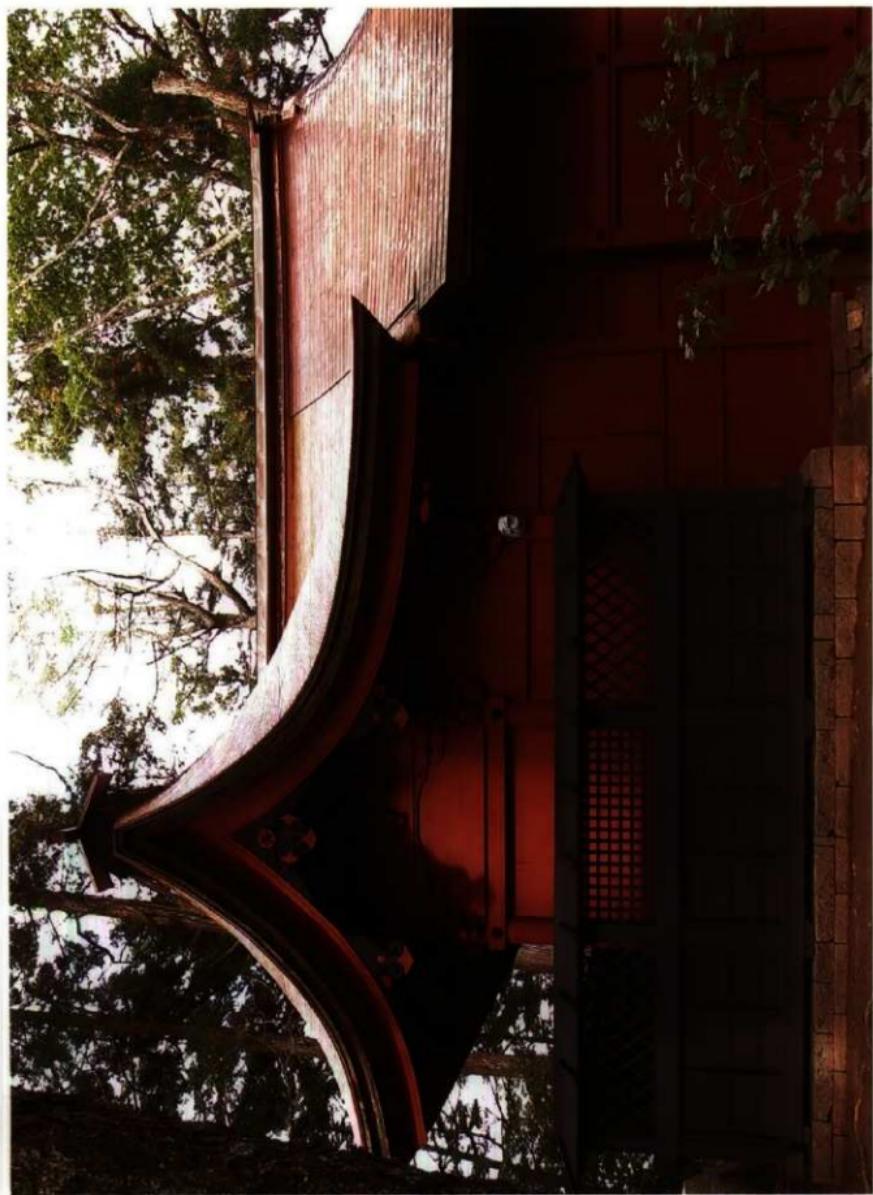
同上



修 理 後



修理後 本殿側面



修理後 本殿側面



修理後 本殿内部



修理後 本殿背面



同 拝殿虹梁



本殿身舍正面腰羽目板唐狮子
右（修理前）



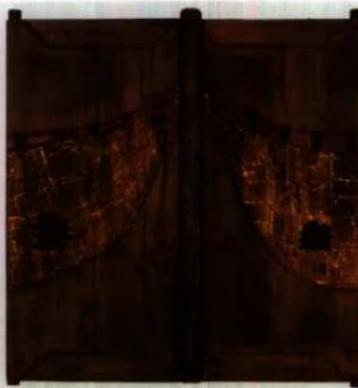
同 中央



同 左



屏絵（修理後）表 右



同 中央



同 左



屏絵 白澤（修理後）



屏繪 青龍（修理後）



屏絵 玄武（修理後）



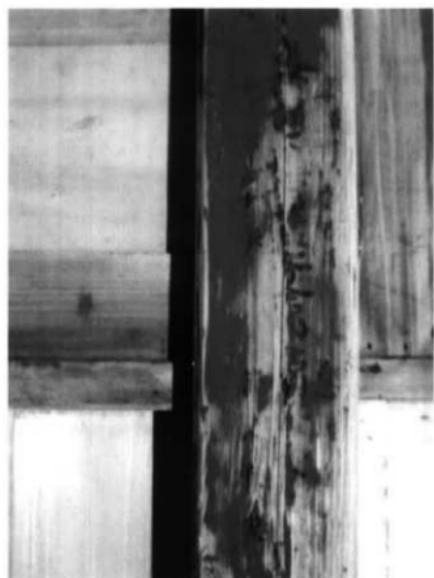
屏繪 朱雀（修理後）



屏绘 白虎（修理後）



屏絵 鹿鳴（修理後）



墨书 全体



同 部分



同 部分



同 部分

**平成16・17年度
白山社奥社保存修理工事報告書**

2007年3月

編集・発行 白山社奥社保存修理委員会

長野県飯田市教育委員会

印 刷 杉本印刷株式会社
